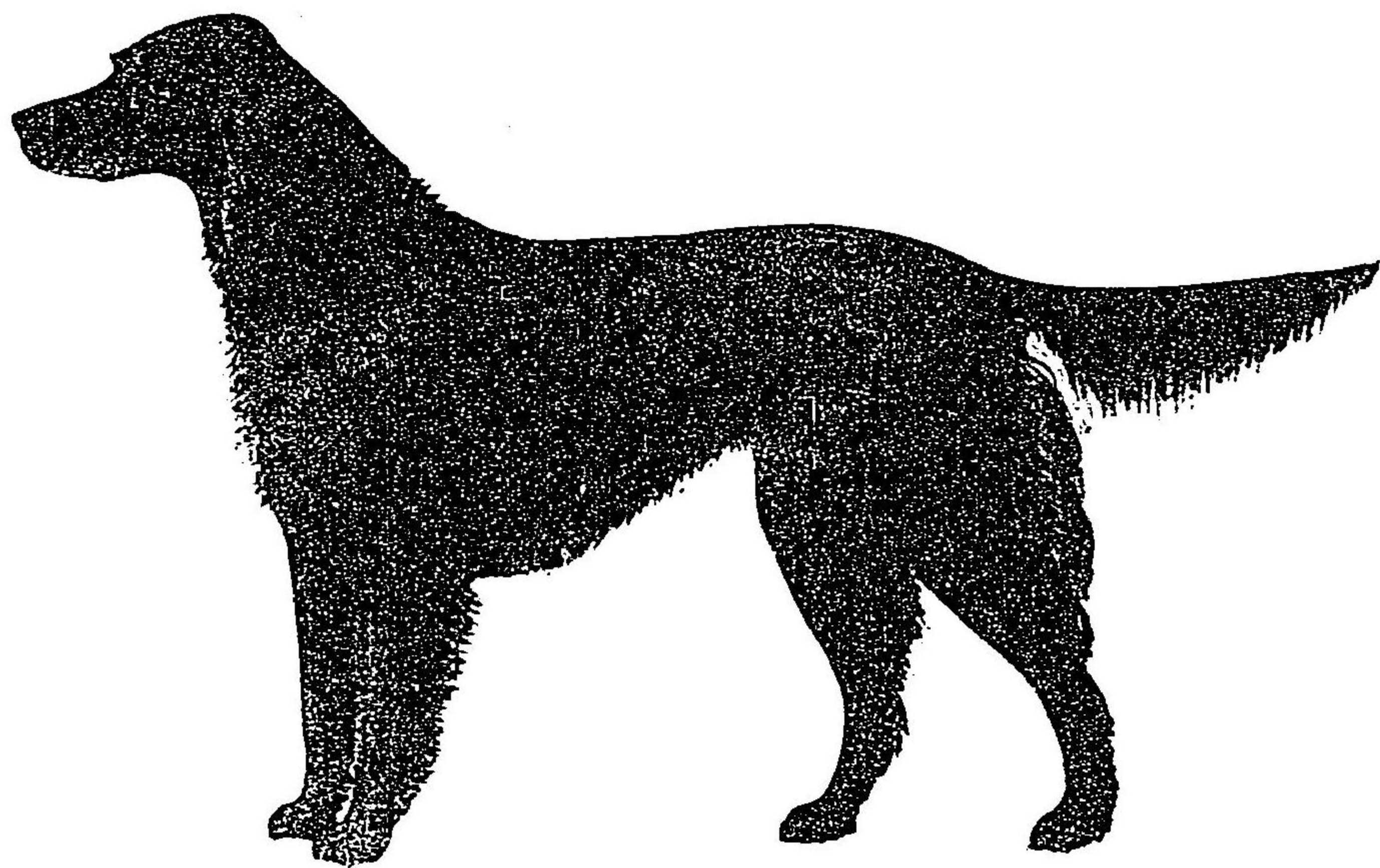


し、前肢は垂直に後肢は腿骨善く發育して稍彎曲し臀部より踵までは較長く踵より以下は短し跗は小にして強固に趾は剛強にして趾を相接して穹狀をなし尾は臀部に低く着き根部は太く先端は尖りて眞直に歩行する時には背と水平に之を揚ぐ體毛は頭部及顔面四肢の前側及耳朶の先端等にては短軟なるも其他の部に於ては長し然れども平滑にして波狀又は環流狀をなさず而して其毛質は「イングリッシュ・セッター」(English Setter)よりは稍粗硬なり又耳朶の表面四肢の後側及腹部兩側の下方には特に長き總毛を生ぜり又趾間にも長毛あり尾毛は下方に總垂し根部にては長く先端にては短し毛色は光輝ある赤褐色又は濃赤褐色にして胸及足部に僅に白斑を見る



一タツセシリア

此種は舉動活潑にして其歩行するや光輝ある體毛に日光照映して極めて美麗なり此種は鳥類を體臭によりて正確に探求し性質穩和寛裕にして好みて水に入るを以て溝渠沼澤に鳴、水鷄等を獵するに適せり而して又山野荆棘の中においても能く數日の困難に堪ゆ

調教稍困難なるも一たび習得するときは精確に記憶し忍耐以て養主の命令に従ひて動作することは他種の及ぶ所にあらず

(は)「ブラック、アンド、タン、セッター」又は「ゴールドン、セッター」(Black and Tan setter or Gordon Setter) 此種は今を距ること約九十餘年前にデューク、オブ、ゴードンカースル(Duke of Gordon Castle)によりて改良せられしものにして大に其名聲を博し英蘭に入りしは千

八百五十九年ニューカッスルに於ける獵犬品評會の後なりき形態は首部「イングリシ、セッター」より稍重大に顛頂骨善く發育し、兩眼の間深く凹み、鼻梁は「イングリシ、セッター」よりは幅廣く眼の内側より鼻端までの長四吋以上あり、鼻孔は大にして黒色に孔端方形なり、眼は濃褐色を呈し、耳朶は他の「セッター」よりは長くして其表面には軟き長毛を波狀に密生し其毛は二吋程も長く垂下す、其他の形態は前種「アイリシ、セッター」に酷似す、尾は稍短くして眞直に先端尖り下方に垂るゝも後肢の踵に達せず、尾の裏面には長き總毛を生じ根部に長く先端に短し、體毛は前掲二種と殆んど異ならざるも稍疎生にして且粗なり、毛色は體の大部分は純黒にして口唇、頰、頸の前面、眼の上部、兩耳の下側、胸の前面、肢及肛門の周圍等には黃褐色紋を現し

尾の下側も其根部より長三吋位の處までは黃褐色なり、體量は四十五斤より五十斤あり、地面より肩先までの高二十吋乃至二十五吋あり

此種の鳥類を探求するや首を高く揚げ體臭を嗅て以て知覺するものなるが若も風雨電雷に際して體臭の知覺に困難なる時は直に地に就き足臭を嗅て以て搜索するの良習性を有せり

### 三「スパニエル」(Spaniel)

西班牙の原産にして古より存する一種類なり古昔は之を鷹獵に使用せりと云ふ其後英國に輸入せられ改良淘汰によりて今日の各種を生ずるに至れり即ち此種を其使用の目的により二種に區別す一は陸上の禽鳥を搜索するに用ひ一は水中の鳥類

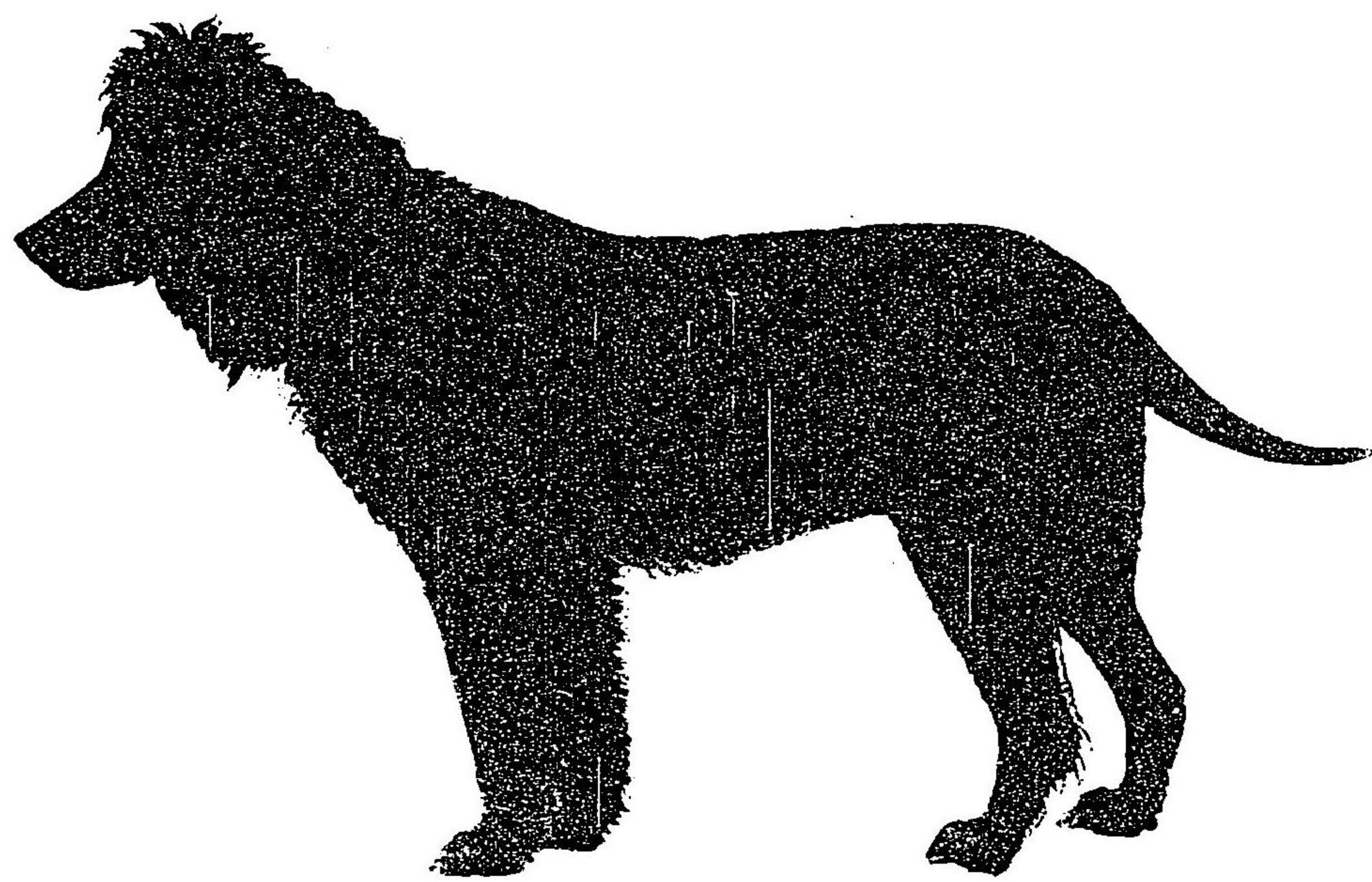
を追ふに用ひらる

(1) ヲオ一タ一スバニエール (Water Spaniel)

是は主に水禽を狩獵するに使用するものにして其形體被毛も水中に入るに適應し殊に趾跖善く發育して大なり之に屬すべきもの尙ほ數種あり

(い) アイリシ、ヲオ一タ一スバニエール (Irish Water Spaniel) 愛蘭の

産にして南部に産するものと北部に産するものとは形態略同じけれども被毛は自ら長短あり北部に飼養せらるるものは南部のものよりも耳短小に且耳朶の被毛と足部に於ける長毛少なく又體毛は長きも著しく捲縮し毛色は一般に赤褐色にして多少の白毛を混ぜず南方のものは毛色暗赤にして耳は長大に其面を被ふの毛は長く體毛は之に反して短くして



ルーエニバスターオウシリア

捲縮せり、體は稍長くして低く、尾は圓く眞直にして長毛なし  
歩行に際しては稍低く之を下垂す、今左に南部に産するもの  
の形態に就きて詳述すれば體量は平均五十五斤、體の高二十  
吋乃至二十四吋あり、頭部大に顛頂骨善く發育して突起し、頭  
部に長き毛冠を戴けるを以て其突起は實際よりは餘程甚し  
く見ゆ、前額は秀で、眼は穩和にして琥珀色を呈す、鼻梁は廣く  
鼻孔は暗赤色を呈して大なり、耳は頭部の下方に着き、耳朶長  
大にして長約そ八吋あり、耳朶の被毛は頗る長くして二十四  
吋許あり、波状をなして密生す、頸は長からずして強剛に「ポイ  
ンター」の如く筋肉に富みて稍彎曲す、肩は斜にして頑丈に、胴  
は圓くして殆んど圓筒状なり、胸は深く其幅は深さと大差な  
く、背は頑丈に、腰は稍穹状をなし、筋肉肥豊に泥濘中を歩行す

るに適せり、尾は鞭の如くして根部太く先端尖れり、尾部の被毛は短くして平滑なるも其下方に面せる部は根部より數吋の長の處より體に近づくに隨ひて漸次長き縮毛を生ぜり、前肢は垂直にして長毛にて被はれ、跗は大にして圓く、後肢は腿骨長く、踵は地に近くあり、後肢の被毛も亦長し、體毛は短き縮毛にして其色暗赤なり、頭部には「メリノー」羊の如く長毛密生して毛冠狀をなし、眼を蔽ふに至る、されども顔面は短毛を以て被はる

此種は性質穩和にして知能よく發達し舉動活潑快樂を感ずるときは跳躍喧噪するも獵に出で、は靜穩にして「ポインター」(Pointer)「セッター」(Setter)「リトリバー」(Retriever)及「フキールド」(Spaniel)の働を兼ねて山野の狩獵に適す然れども此種

は元來其名の示す如く水鳥獵に至適なるものにして體毛長く下毛密生して水獺の如くなるを以て水中に入るも皮膚は決して水に濕はず嚴冬の候氷塊の流るゝ池沼河川中にも跳入り又氣象勇敢にして波濤澎湃せる海洋に游泳し或は三尺の絶壁より深潭中に投躍して水鳥を追躡する等水中に於ける働作は險を冒すも敢てするは其名に背かずと謂ふべし然れども性質穩和なるが故に又愛玩を兼ねて小兒の保護をなさしむるに適し假令小兒の其長き耳朵を引き戯むるゝあるも咬嚼する等のことなく若しも其保護する小兒に危害を與ふるものあらむか防衛頗る努む

(ろ)「イングリッシュウォータースパニエル」(English Water Spaniel) 此種は十四世紀の頃に於て既に存在したりし種類なり其性質

前種に似て善く水中に游泳し且深く潜水する一種の技能を有し嚴寒の候と雖も潜水することを辭せざるなり是は皮膚より分泌する一種の脂肪ありて體毛に膏せらるゝが爲に水によりて濕潤することなくして之を反撥するに因る又其嗅覺頗る鋭くして銃創を被ふりたる水禽の逸走するが如きことあらば泥濘又は水草深き處に之を搜索して遠き距離にあるものをも能く嗅知し「セッター」の如く坐止して以て其所在を養主に指示す

此種に大小二種ありて大形のものゝは海灣等に使用し小形のものゝは河川又は柳蘆等の叢生せる沼澤に使用す此種の形態は頭部長くして幅狭く前頭突起せるも甚しからず鼻梁は長くして先端稍尖り顎は狭く眼は體に比すれば小

にして眼光鋭く其色褐色なり顔面は軟き短毛にて被はれ耳朶は長く且幅廣くして頭部の前方に近く着きて表裏共に體毛よりも長き毛にて被はる頸は短太に胸は大に膈は圓く腰部方形に腿部は筋肉に富み趾間廣くして多く毛を生じ體毛は體の上面より兩側にかけて縮毛厚く生ずるも腹部の兩側及脚の後側の被毛は捲縮せずして伸長なり尾は大抵七吋より十吋位の長に截去せらるゝを常とし歩行する時には背の水平線より稍高く之を揚ぐ毛色は黒白斑及白と赤褐の駁色又は黒色及赤褐色等の單色にして狀貌強壯且嚴厲なり

(2) 「クラムバー、スパニエル」(Clumber Spaniel)

「ダニエルスルウル、スポーツ」(Daniels Rural Sport)によれば現今の「クラムバー」の祖先は今を距ること二百年前佛蘭西の貴族(Die

de Nonailles)氏より Duke of Newcastle に贈與せられ其後長く同侯爵により飼養せられたりし一種の犬に「グラムバー」と命名せられたるも近年までは餘り廣く世に知られずして僅に英蘭に於ける貴族又は豪農により飼養せられしに過ぎざりしが今日にては汎く各地に傳播するに至れり上述の如くして長く同族繁殖の行はれし結果體質虚弱に傾き殊に仔犬の成育尤困難なりとす此種は「ランド、スパニエル」(Land spaniel)と他種との雜種に出でたるものなりとは多くの人の認むる所なるも亦「タアンズピット」(Turnspit)四肢短く體軀長き犬種にして今は全く絶滅せる一種類なり」と「ランド、スパニエル」との間に出來しなりとも云へり未だ何れか正當なるやを知らず

此種は所謂雜用犬にして水獵又は陸獵にも適し鶉、山鶉、鶉、鶉、鶉

等を嗅索せしむるに用ひ又鳴雁類の追躡にも用ひられ獵時に方り沈黙靜穩にして遠く養主の所在を離れざるを以て射撃に多くの機會を與ふ又此種は銃獵に使用するのみならず番犬としても注意周到にして能く侵入者を防禦す

此種一般の姿容は體軀長くして低けれども重く見えて態度沈着に伶俐の相貌を有し又遲鈍ならざるなり

形態は體重五十五斤乃至六十五斤、地面より肩先までの高十八吋より二十吋あり、首部巨大に頭は扁たく、前額圓狀にして突起し顱頂骨善く發育し、兩眼の間深く窪陷し其窪陷は頭部にまで及べり、顎は長くして廣く且厚く、上唇深く垂下せり、鼻先は方形ならざるも強固に、鼻孔は大にして肉色を呈し間には櫻色を呈せるものあり、眼は大に深くして穩和に見え其色暗緑なり、耳朶



は長くして先端廣く頭部の下方に近く頬に接して着き軟き短毛にて被はれ其前縁には疎生少數の軟くして波状をなせる長毛を見る、頸は長く頑丈にして皮膚に皺襞を有せり、肩は重大にして筋肉に富み胸は深く背は眞直に廣くして長く其長は地面より肩先に至る長の二倍乃至三倍あり、腰は圓くして頑強なり、前肢は骨太に垂直にして短く、後肢亦太くして短けれども前肢よりは稍、軽く見ゆ前後肢共に脚部に長毛を生じ跗は大にして趾間に長毛を生ぜり、體毛は細軟にして平滑に餘り長からずして厚く密生せり、毛色は橙黄色と白色又は淡黄と白の駁色なり、尾は波状をなせる長毛を多く被ふり歩行するときは低く下垂す、尾は大抵適恰の長に切斷せらる

(3) 「サッセックス、スパニエル」(Sussex Spaniel)

此種は毛色赤褐にして光澤を有するも他種に比して姿容美麗といふべからず然れども其働作質實に水陸共に追躡の用に適し且其體毛の厚きが故に「ポインター」又は「セッター」の入る能はざる荆棘中にも進入す、されど其缺點とする所は鳥類に近づくに隨ひて聲を發するにありとす

形態は頭部長く幅廣く雙眼の間深く凹窪して長く頭部に走れり前顎部突起し顛頂骨は善く發育し圓くして突起せず、眼は溫和に、鼻梁は長く三吋より三吋半あり幅も亦廣く鼻孔大にして赤褐色を呈す、耳朵は長くして根部幅狭く中央は廣く先端は圓く其被毛は細軟にして波状をなせり、頸は短く頑丈にして稍、穹状をなし歩行する時背の水平線以上に頭を揚ぐるこゝろ、罕なり、胸は圓く殊に肩の後方に於て然り、肩は狭く、脚部は長く膝節は

地に近くあり、背及腰は長く幅廣く厚大なり而も肋骨の腹部に  
 近き處肥厚なるが故に極めて強壯の態を表せり又胸部豐圓な  
 るが爲に前肢の動もすれば屈曲するを見る踵骨は短くして太  
 く、跗は圓く趾は穹狀をなして長毛にて被はる體毛は纖軟に波  
 狀をなして厚く體を被ひ、肢の上部の後側及尾部に於ける被毛  
 は長し、尾は普通に之を切斷せらる

(4)「ランド、スパニエール」(Land Spaniel)

此種は山野の鳥類を搜索し或は銳劍を被ふりたる獵鳥の逸走  
 を追躡捕獲するに用ひらる

(い)「スプリングル」(Springer) 形態前種に似て丈低く、胴長く、頭部は、  
 「ゴールドン、セッター」に似て稍、長く、耳朵は頭の下方の近き處に  
 着きて葉狀形をなし、耳朵の被毛は甚饒多なり、眼は暗褐色を

呈し、鼻は大に幅廣くして嗅覺の銳敏を示し、大體の相貌穩順  
 にして沈勇なるを表せり、體毛は軟くして平滑に厚く生じて  
 光澤を有せり被毛の殊に厚く生ぜるものにおいては稍、波狀  
 をなす耳朵及前肢の後側、腹部の左右兩側の下方、臀部の兩側  
 及趾跗等には長毛を生ぜり、前肢は頑丈に短くして眞直なり、  
 後肢は腿骨彎曲し、尾は太くして歩行する時は背の水平線よ  
 りも稍、高く之を揚ぐ、毛色は黒色、暗赤色、橙黄色等の單色なる  
 か又は此等の色と白色との駁色なり、體量は二十八斤乃至四  
 十五斤あり、地面より肩先までの高十三寸より十五寸に至る  
 一般の姿容は後に述ぶる「コッカー」(Cocker)より重大にして其舉  
 動活潑に勇猛果敢の風あり性質穩順にし沈黙なれば訓練し  
 易きも長時間の狩獵に堪えざるを以て餘りに使用せられず

(ろ)「コッカー、スパニエル」(Cocker Spaniel) 體軀前種より矮小にして其體重牝犬にして十八斤を有するもの少なく牡犬にして二十五斤を過ぐるもの稀なり又前種に比すれば快濶にして沈黙なるも鳥類に近づくときは低聲に鋭く吠えて之を獵主に報じ又適當なる訓練を施せば鳥の種類によりて其吠聲を異にし養主をして何種の鳥類なるを辨識せしむ

此種は獵に方りて「ポインター」「セッター」「ハウンド」又は「レトリバー」等の動作をなし又雑用に使用するに於て忍耐にして最適良なり而して此種の最巧妙なる技能は林叢又は荆棘中に山鶉を搜索するにありて「コッカー」なる名稱も蓋し此に出でしならむ此種は唯に獵用のみならず其體軀の餘り大ならざるを以て室内の愛玩に宜しく又適當に之を訓練するときは諸

種の戲藝に堪能なるに至る穩和に忍耐に能く訓練を習得し養主の指揮に應じて種々の動作をなし恰も人語を解するかの感あらしむ一米人は一年の間に於て四十二種の戲藝を訓練し得たりと云ふ

此種の形態は頭部の長さ中庸にして前額突出し顛頂骨は圓くして隆起し、雙眼の間は狹窄し、兩耳の間は幅廣く、顎は眼部より漸次に狹まり前面より望見すれば頭形扇状をなせり、眼は圓くして其色體毛と均しく、鼻梁は廣くして先端方形なり、耳朵は葉状にして頭の下方に近き處に着きて長き細毛にて被はる、頸は長く容易く鼻を地に附け得る位にして肩の方に至るに隨ひて漸く太し、胸部は肋骨善く發育し幅廣くして深く、背は短く、腰部大にして、鼻端より尾の根部に至る長は地面

より肩先までの高の二倍以上なり、前肢は短く骨太にして筋肉發育し、踵は短くして地に近くあり、後肢は頑丈にして腿骨彎曲し踵は垂直にして跗は圓く、蹠は厚く角質なり、趾間は廣からずして多く毛を生ぜり、毛色は赤褐色、黒褐色又は黄褐色なるか此等の色と白色との駁色なり、體毛は纖軟にして波状をなし胸肢及尾部には長毛あり、尾は大抵長の半位に切斷せらるゝも歩行するときには背の水平線の處まで之を揚ぐ獵場に出で、搜索を行ふに當りては尾を低く下げて劇しく振り動かすことは此種の特質なりとす

(は)「ノーフォーク、スパニエル」(Norfolk Spaniel) 英國の各地に飼養せらるゝ種類にして毛色は一般に白色と赤褐色の駁色にして時に黒白の駁色又稀に黄褐と白との駁色あり、地面より肩

までの高は「サッセックス」又は「クラムパー」よりは高く且軽く大抵「セッター」に同しかるべし、耳朵は葉状をなして長大に耳朵の被毛は長し、其性質粗暴にして訓練に困難なり且獵鳥を劇しく咬噬するの悪癖あり又此種の純粹なるもの甚少なき等に於て今日にては餘りに用ひられず

(二)「ウェルズ、スパニエル」(Wales Spaniel)「キボンシャール、スパニエル」(Devonshire Spaniel) 兩者共に前者と同しく純粹なるもの稀にして且漸々其數を減しつゝあり體形前種に類似し其毛色は赤褐色にして耳朵は葉状をなして餘り長大ならず以上の外「スパニエル」に屬すべきもの「トオイ、スパニエル」(Toy Spaniel)「狎及「マルチースドッグ」(Maltese dog)等あれど其使用の目的異なるものあるを以て項を別ちて詳説すべし

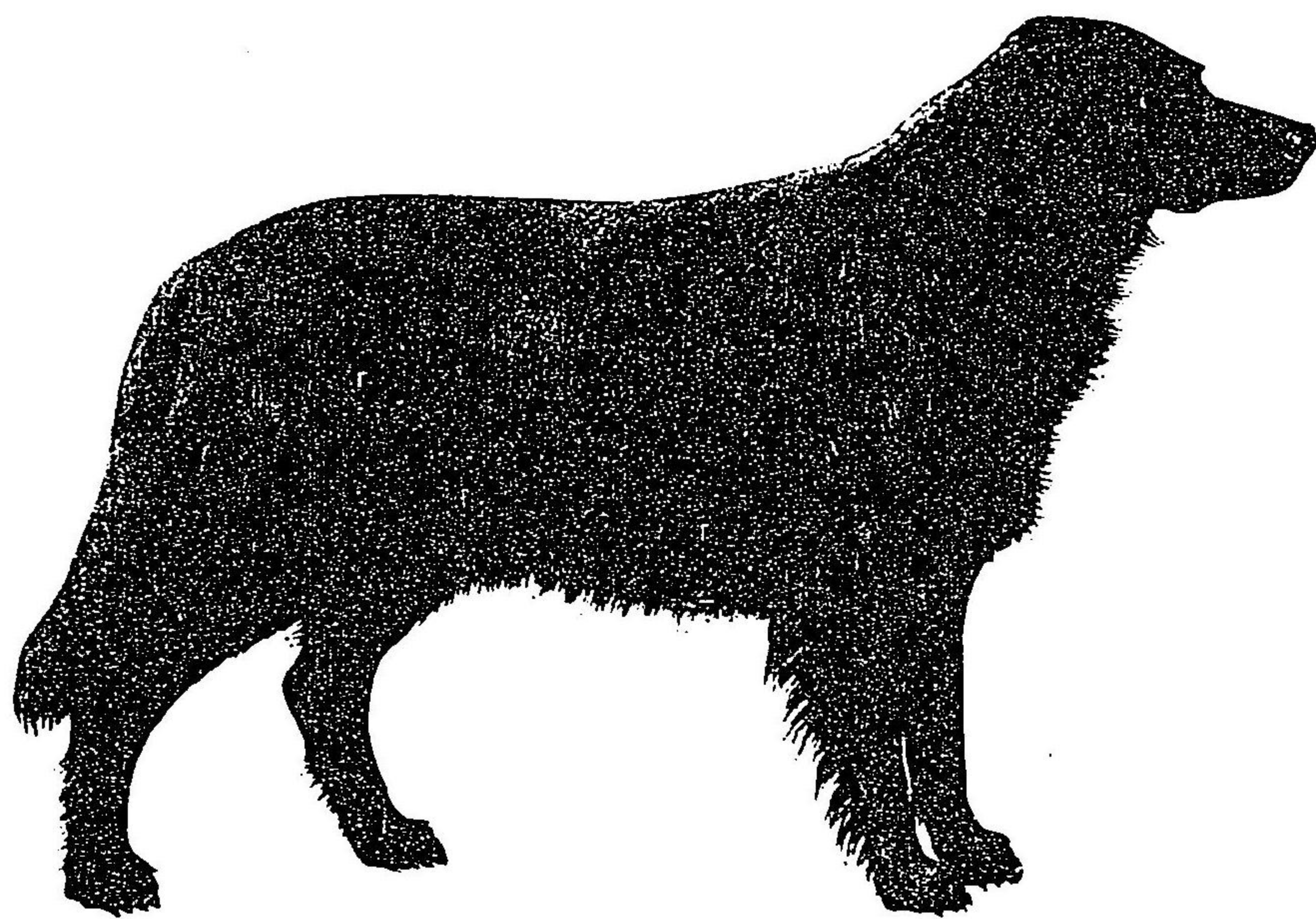
四「レトリバー」(Retriever)

此種は飛鳥及小獸の彈創を被ふり遠く逸走して草叢中に潜伏せるものを鋭敏なる嗅覺により追跡發見し之を捕へて齎し來るの習性を有せり此種は「ニューファンドランドドッグ」(Newfoundland dog)と「セッター」の雜種に出でたりと云ひ或は「ウオーター・スパニエル」と「ニューファンドランドドッグ」の雜種なりとも云へり

此種に二種あり一は被毛波状をなし一は縮毛を被ふれり

(一)「ウェービー・コウテッド・レトリバー」(Wavy-Coated Retriever) 頭部

は廣くして扁たく鼻梁は長くして幅稍廣く鼻孔大にして黒色を呈し顎は頑丈に齒は強固に整列し眼は尋常に黒色を呈して穩和に見え耳は小にして頭部の後方に着き頬に接して



レトリバー

下垂し、耳朶の被毛は短し、頸は長くして筋肉善く發育し、胸は幅廣くして恰好の深を有し、體軀は重大にして腰部は幅廣く且厚し、前肢は垂直にして筋肉に富み、跗は大に充實して厚く趾は稍穹状をなし、趾間には長毛を疎生す、後肢は腿部善く發育し、踵は地に近くあり、尾には長き總毛を有し、歩行する時には高く之を揚ぐ、體毛は厚く密生し、餘り長からずして稍波状をなし、毛色は純黒にして間には白又は黃褐色の點紋を有するものあり

(ろ)「カアリースー、コウテッド、レトリバー」(Curly-Coated Retriever) 前者と相似て、只頭部稍細く、鼻梁及顎は長くして尖り、體毛皺縮して、其色黒色又は赤褐色なるの差異あるのみ

五「チェサピークスベイドツグ」(the Chesapeake Bay

dog)

一千八百七年マリノーランドバルチイモア(Maryland Baltimore)の「カントン」(Canton)號がニウフアウンドランド(Newfoundland)より英國に航せし時二本櫓を有せる一船の沈没せんとするに會し之が船員を救助して「カントン」號の甲板に移し同時に雌雄二頭の仔犬をも共に救助したり此等の水夫はノーフォーク(Norfolk)に上陸し二頭の仔犬は英國船長より「ギニー」にて「カントン」號の乗組員に鬻がれて遂にバルチイモア(Baltimore)に持來たされ牡は「セイラー」(Sailor)と名け牝は「カントン」(Canton)と命ぜられたり毛色「セイラー」は暗褐色「カントン」は黒色にして共に其毛は長からざるも厚く密生して波狀をなし體の大は「ニウフアウンドランド、ドッグ」(Newfoundland dog)より小なりしが其後「セイラー」はマリイ

ランドの東海岸に移され其處に「セイラー」種として其子孫を遺すに至れり「カントン」はスパロー岬に留められ其後「セッター」等と雜種して漸々改良せられ以て今日の「チェサピークスベイドッグ」を出せりといふ

水鳥獵に巧にして追躡に適し靜穩沈着にして氷上又は泥濘中にも能く奔躍して執念に鳥類を追跡し且其性質伶俐なるが故に一たび會得するときは能く之を記憶して決して忘るゝことなく水鳥獵のみならず他の獵にも用ひられ又番犬としても注意深くして能く侵入者を防禦す

形態は頭部廣く眼は小にして黄色を呈し耳亦小なり顔面には甚短き毛を密生し頸は頑丈なるも自由なる運動に適し胸は深くして廣く背及腰は強大にして水中に永く游泳するに堪へ脚

は短くして蹠善く發育し、前肢垂直なり、尾は太く且長くして僅少の長毛を有せり、體毛は短く稍粗硬にして厚く密生し、背肩及腰部にては波状をなし、其下には羊毛の如き纖軟なる短毛密生せり、毛色は暗褐色又は暗綠色なり、體重は牡犬にて六七十斤、牝犬にて四十五斤乃至五十五斤あり、體の高二十五吋位にして、中形の「セッター」と其形相似たり

### 第三節 番 犬

番犬とは善く養主の邸宅を守護して侵入者を防禦するの目的に使用せらるゝものなり、勿論他の獸獵犬、鳥獵犬、愛玩犬の如きも番犬に兼用すと雖も、或は常に喧噪するを以て、縱令侵入者ありて咆哮之を報ずるあるも、養主が之を辨識し能はざるの虞あり

り然るに番犬にありては平時は靜穩にして喧噪すること罕なり、れども一朝侵入者あらむか、猛然咆哮し以て養主に報じて注意を促し、或は直に侵入者を咬嚼防禦するの能力を有せり、此には便宜上番犬以外の雜用犬をも包括して記述する所あるべし

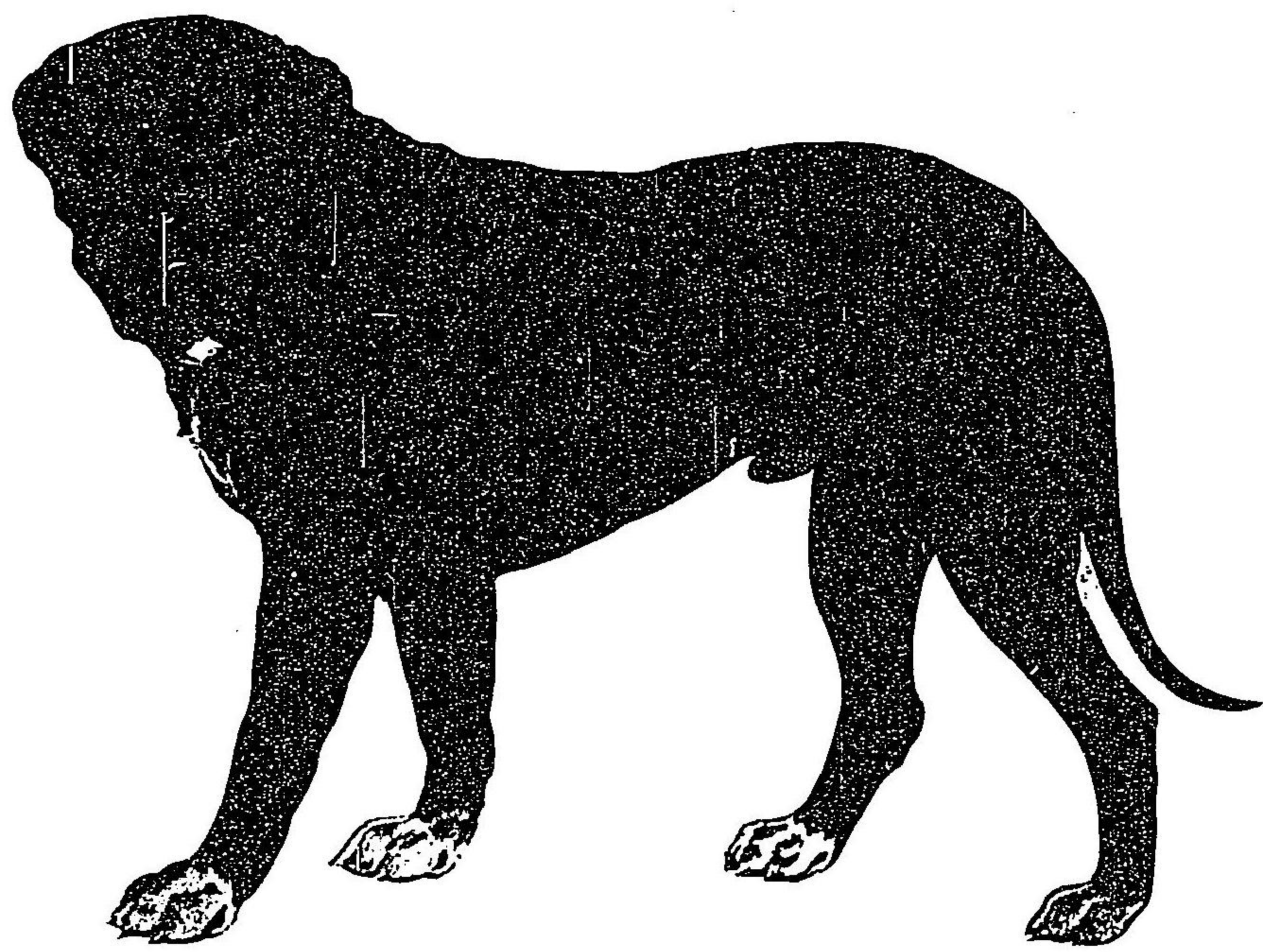
#### 一「マスティブ」(Mastiff)

此種は羅馬人種の英國に渡らざりし以前より既に存在する種類にして、其原種は「カニス、モロサス」(Canis molossus)なるが如し、勿論英國に於て淘汰改良せられしものなり、故に今日にても「イングリッシュ、マスティブ」(English mastiff)と呼べり、形軀巨大、狀貌魁偉にして、其性質穩順に能く養主に馴るゝも、他の人に對しては決して馴るゝことなし、而して敵を攻撃するの



時には必ず前面より之に向ひ且咆哮喧號することなくして直進咬嚼することをなす其性癖を矯正せんとして「ニューファウン  
ドランド・ドッグ」(Newfoundland dog)又はブラッド・ハウンド(Blood hound)と雑種を試みたるの人ありたるも反て一層兇暴の性質に傾くのみにて好結果を得ざるが故に之が純粹種のもの依然として貴ばるゝなり

形態は首部重大にして頭は短く幅廣くして厚く前頭は廣く平かにして皮膚に皺あり、雙眼の間隔は廣く且凹窪深くして前頭に走り眼は小にして深奥に其色褐色なり、鼻孔は大にして先端の縦溝深く、顎は厚く口端方形にして幅廣く間には下顎の上顎よりも長く突出せるものあり、口唇は深く垂下するも口端にては淺し耳朶は小にして其根部より垂下するものあり或は半ば



フ イ テ ス マ

曲折せるものあり、頸は短太にして垂肉あり、胸は深くして廣く、前肢の股間亦濶し、肩は善く發育して大に、背は長く廣く重大にして、腰部及腿部は筋肉に富みて強剛なり、前肢は骨太く短くして垂直に、後肢は腿骨より彎曲して踵に迫り間には距爪を有するものあり、尾は根部太く先端に至るに隨ひて細く尖り常に懸垂せるも一旦激怒するときは高く之を背上に揚ぐ、體毛は短硬にして赤褐色又は黄褐色なり、鼻端の周圍及耳には黒色、短毛あり、歐洲大陸に飼養せらるるものには黒白又は赤白の駁色のものあり、地面より肩先までの高三、十寸より三、四寸、體量は百三十斤より二百斤に達し、肩より尾の根部までの長は三十寸許あり、一見恐るべきの狀貌を有し、其吠る聲鈍く太くして一種嚴厲の氣を帯び、性質穩順なれども一たび忿怒するときは勇猛に

して如何なる敵手をも畏れずして之に向ふ然れども小兒又は仔犬の如き弱者に危害を加ふることなし

ニ<sub>二</sub>マステフ、オブ、チベット<sub>一</sub> (Mastiff of Tibet)

大體の形容は前種に似て頭部一層重大にして厚く、顛頂骨の突起著しく、前額部の皮膚積状をなし眼瞼を蔽ふに至る、頸は著しく太く、體毛は粗くして尾部には長毛を見る、毛色は濃黒なれども耳朶、四肢及鼻の周圍の被毛は黄褐色なり

三<sub>二</sub>ブルドッグ<sub>一</sub> (Bull-dog)

是は前種と同じく「カニス、モロサス」(Canis Molossus)より出でしものなりといへり初めジェームス一世 (James I) 頃には此種を争闘せしめて賭博をなすこと盛に流行したりしが其後牡牛を屠るに犬をして咬殺せしむるときは其肉美味なりとて此種を其用

に供するに及んで英國に於ける屠牛者は各戸之を飼養するに至れり

此種は敵手と闘ふや必ず頭部に咬み付きて其死するに至るまで之を放たず甚しきは假令自己の體は頭軀所を異にするも猶ほ之を放たざるものあり其鼻の上方に反向して鼻孔上方に開けるを以て咬嚙せる儘永く敵に懸れるに當りて自由に呼吸し得るなり或は人工を以て鼻端の中央より縦に少しく切開して鼻孔をして一層上方に向はしむるものあり此種の頭部は殊に善く發育して重大に體軀に比して恰好を得ざる程なり其肩の高さ低きが故に牡牛を咬殺する時に於て牡牛の角に懸りて害を被ふること少なしとす此種は牡牛を屠殺するの目的を以て改良飼育せられしが其後一千八百三十五年英國政府は動物虐

待禁止法令を發布せる結果「ブルドッグ」の争鬪を禁止し又牛畜を犬によりて屠殺することをも禁止したり爾來此種の飼養犬に減じ爲に其形體紊れて性格亦劣變したりといへども今日に残存せるものも猶ほ祖先の性質を遺傳し其性猛惡にして繋鎖せらるゝ場合に於て人の接近するあれば直に咬害を加ふ然れども放飼のものは比較的穩和にして平常には普通の人に危害を加ふることなし

形態は頭部重大に圓くして幅廣く前頭には皮膚の積あり、雙眼の間深く窪み、耳は小に半立して頭部の上方に着き、鼻梁は短くして廣く鼻端は上方に反向して廣く恰かも壓平したるものゝ如し、顎は強固にして廣く先端方形に、下顎は上顎より少しく突出し、背は短く、胸は實して深く廣くして、肋骨は腹部に近づくに

随ひて淺し、脚部短く筋肉に富みて肢間の距離廣く、趾は穹状をなして趾々相開けり、體毛は短く平滑にして光澤あり、毛色は白又は黃褐色なり、體重五十斤内外あり通常尾及び耳は截斷せらる

#### 四「プードル」(Poodle)

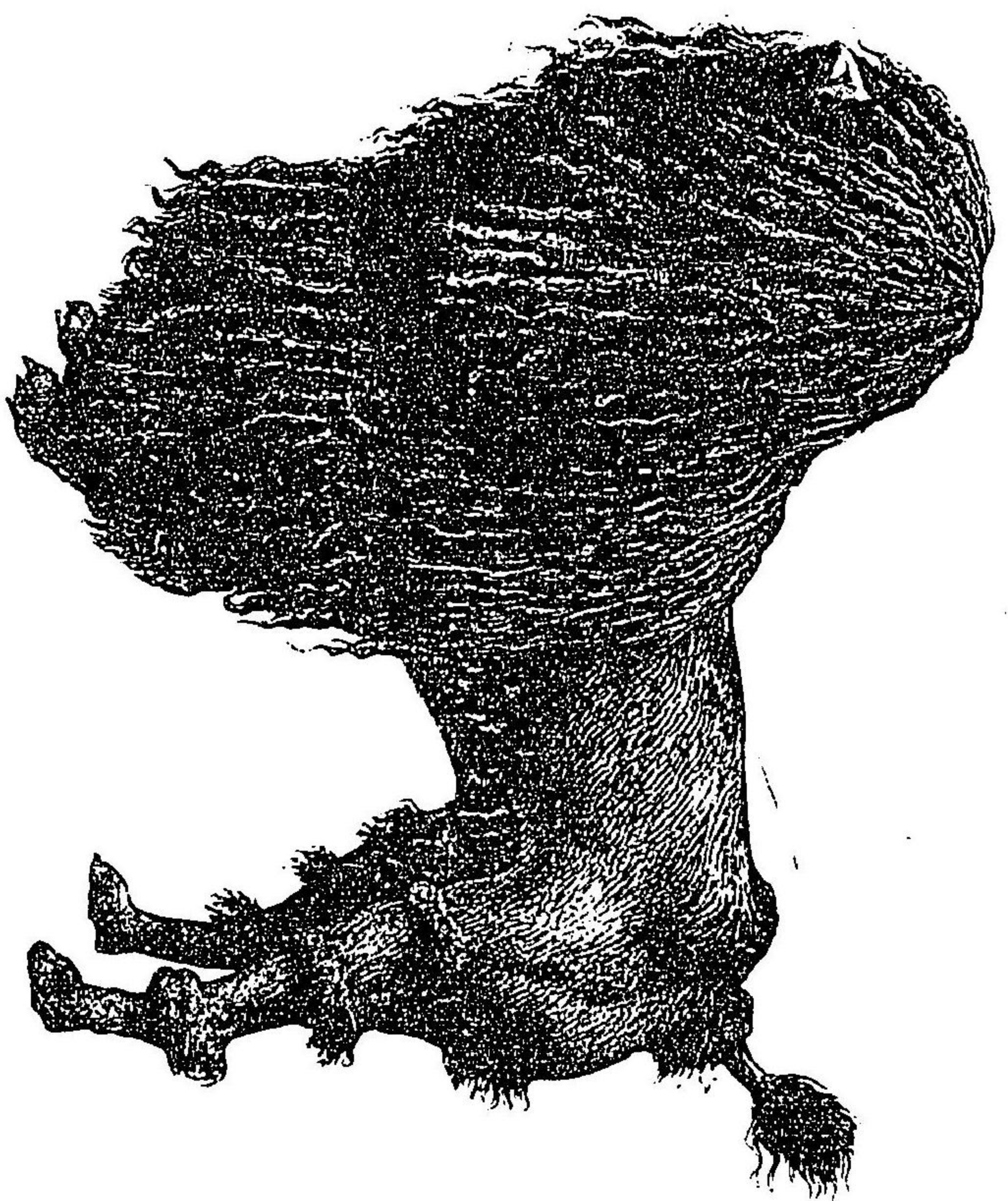
此種は「スパニエル」系統に屬することは明かなるも其形態の異なる特徴を有するに至りたるは其生産地の氣候と其使用方法によりて自ら變化を來せしものなるべしといふ

此種に關する記事は一千五百五十五年刊行コンラッド、ゲスネル(Conrad Gessner)氏の著書に登載せられ其後の記事はドクトル、ラキチンゲル(Fischer)氏の犬及其種類(Der Hund seine Rassen)に詳なるが之に據れば大形の「プードル」は亞弗利加の西北部なるモロッコ

(Morocco)又はアルゼリア邊より出で小形の「プードル」は其出所明かならざるも恐らくは西班牙或は葡萄牙邊より出しならんと言へり

而して現今に於て「プードル」の種類は四種を數へらる「ロシヤン、プードル」(Russian Poodle)「シヤフマン、プードル」(German Poodle)「フレンチ、プードル」或は「カニシ」(French Poodle or Caniche)及「バーベット」(Barbet)是なり

(い)「ロシヤン、プードル」(Russian Poodle) 「プードル」四種中にありて最大なる種類に係り毛色は通常黒色なれども時に或は白色のもの又黒白駁色のものあり、頭部は長く楔形をなし前頭部少しく突起せり、眼は暗赤色又は黄赤色を呈し、耳は頭部の高處に着きて頬部に接して垂れ、肢は垂直にして筋肉に富み、跗



は圓く趾々疎開し蹠は善く發達せり、體毛は長太に殆んど針金の如く硬くして稍捲縮せり、性質慄悍勇猛にして御し難しとす

(ろ)「ジャアマン、プードル」(German Poodle) 是は獨逸種にして「プードル」種の標準ともいふべきの形態を有し首部楔形にして額部突起し、兩耳の間は廣くして扁平に、顛頂骨著しく突起して腦の發育善良なるを示し、眼は小にして活潑伶俐を表し、雙眼の位置頗る離隔せり、耳は頭部の下方に近き處に着き、耳朶長く垂れて之を引けば鼻端に達す、口唇は薄く淺くして切齒を蔽ふ位なり、鼻部の色は體毛漆黒のものにありては黒色に體毛白色のものにありては暗赤褐色なり、頸は骨太に筋肉に富みて頑丈なり、肩は長く斜にして水中に重量のものを咬へて

之を搬致するに適せり、胸は幅狭くして甚深きも、グレイハウ  
 ンド (Greyhound) の如くにはあらず、背は短く幅廣く方形に、腰稍  
 穹状をなして強固に見ゆ、前肢は垂直に、後肢は發育充分にし  
 て水中にありて長時間而も速に游泳するに適せり、趾跖は圓  
 く大に、蹠は充分に發育して爪の根部まで擴れり、尾は通常切  
 斷せらるゝも元來直眞にして背の水平線より約そ七十度の  
 角度をなして斜に高く之を揚ぐ、されども時に捲き揚げて「パッ  
 グ」(Pug) の如くなるものあり、體毛は他三種と異なり長く絲の  
 如くして幾分捲縮し而して頭頂より尾の根部に至るまで背  
 線によりて左右に分れて地面に達する程の長あり、前肢は全  
 く被毛にて蔽はれ又胸部、頸部及肩部にも長毛ありて體の高  
 十八吋のものにして其肩に生ぜる毛の長二十一吋なるもの

あり、耳朵の毛も亦長く肩を蔽ひて殆んど耳の存在を認め難  
 き程なり、頭部の毛も長くして顔面を蔽ひ、毛色は黒色又は白  
 色にして間には赤褐色のもの又は黑白駁色のものあり  
 此種は水中にありて長時間而も疾速に游泳し極端に云へば  
 水陸兩棲ともいふべくして性來水中に入るを好み其游泳力  
 の大なるは決して「ニューフランド」(Newfoundland  
 Dog) 又は「ウォータースパニエル」(Waterspaniel) の及ぶ所  
 にあらず且嗅覺力大にして群集雜沓の中といへども能く養主  
 に追従して之を失はず又創傷したる鳥禽を搜索して決して  
 過つことなし故に獨逸にては重に追躡犬として用ひられ且  
 同國にては夏時には其毛を頭部、四肢及胸部を殘して他は皆  
 短く刈り去るなり尤此慣習は廣く各國にも行はれて「プード



ル」は皆此の如く刈毛することゝなせり  
 (は)「フレンチプードル」(French Poodle) 或は「カニシ」 此種は佛國にて水鳥獵又は追躡犬として使用せられ元來強健の體質なるに加へて體毛長くして縮れ厚く生ぜるは寒暖何れの氣候にも堪ゆ

一般の形態は前者に酷似して稍小形に、兩耳の間廣くして圓狀をなし、眼は前種に比して大に、耳は頭部に高く着き間には耳朶長大にして鼻端に達する程のものあり、頸は長く、肢も亦稍長くして後肢は前種よりも垂直に近し、趾は善く發育せり佛國にては此種は體毛の剪除を行ふを普通とせるが其刈り方は略前種と同じけれども彼は頭部、四肢、胸部を殘して肋骨の終りまでを刈り此は肩の邊より以下悉く之を剪り去るな

り

(二)「バアベット」(Barbet) 佛國種の小形なるものにして頭部は其體に比して大に且圓形なり、耳は長く垂下して鼻端に達す、毛色は普通白色にして間には耳及背に黃褐色の斑紋を有するものあり、體軀強剛に、尾は長くして僅に曲れるも之を截り去るを常とす、眼は大にして黒く常に滴涙を出せるを見る、體毛は軟柔なる縮毛にして光澤ありて美麗なり、體量平均六斤半位にして肩の高は八吋以下なり

上述四種の「プードル」は知能銳敏にして能く諸種の技藝を訓練し得べし然れども性質慄悍獍猛にして養主には從順なるも他の人に對しては動もすれば危害を加ふるが故に獵犬としては適當ならずして番犬たるの性格を有するものなり此種は其仔

犬の成育至難にして一産の仔兒其三分の二を保育し得ること稀なり然れども一たび成育を遂げしものは健康にして強壯なりとす

#### 五「グリフオンドッグ」(Griffondog)

此種は「シープドッグ」(Sheepdog)と「ブードル」との雑種に出づといへり一般の形態前種に似て只其耳朶十分に懸垂せず體毛長けれども縮れず毛色は黒色にして兩眼の上部及足部には黃褐色の小點紋を見る而して口顎の先端の周圍に長毛を有せるは此種の特徴なりとす

#### 六「ライオンドッグ」(Liondog)

此種は「ブードル」と「マルチースドッグ」(Maltese dog)との雑種により成れりといふ小形の種類にして長くして捲縮せる軟毛を以て

被はれ其耳朶小なり

此種は今日飼養するもの稀なるが「ブードル」と同じく其體毛を刈りて牡獅の如き狀貌となすを以て「ライオンドッグ」の名あり

#### 七「ダルマシヤンドッグ」又は「コウチ

ドッグ」(Dalmatian or Coach-dog)

此種の原産地を印度なりとなすものあれども其は謬にしてアドリアチック(Adratic Sea)海の東北海岸なるダルマシヤ(Dalmatia)の原産にして「ブルテールリヤ」(Bull terrier)と「ポインター」(Pointer)との雑種によりて出來しなりと云へり此種が「ポインター」の血を混ぜることは其形態の酷似せること及其性習として「ポインター」の如く停止して指示をなすによりて證すべし  
此種は肩の高二十五吋許にして其特徴とし見るべきは體毛白

色にして直径一吋許なる黑色點斑の齊整に散在すること是なり其點斑は顔面、耳朶及四肢、尾部に散在す間には此點斑の暗赤色なるものあり時に仔兒生産の初には全身白毛にして全く斑紋を有せざることあるも其後數日にして點斑を現出し來るなり

此種の嗅覺は「ハウンド」に比して鈍けれども其性質伶俐にして勇敢なりとす而して喜びて馬と櫪を同して起臥するの性あるを以て昔時は乘馬又は馬車の先驅として使用せられ養主駕を下れば馬の傍に坐して之を護るの務をなせり其名稱の出づる蓋し之に因れり然れども今日にては此目的に使用せらるゝこと稀にして其容姿美麗なるを以て専ら觀賞に兼ねて邸宅の番犬となす此種は其原産地なるダルマシヤにては鳥獵に使用し

て可なりの働作をなすと云ふ體格「ポインター」に似て頭部扁平にして幅廣く、鼻孔大にして黑色を呈し、耳朶は小にしてV字形をなせるが大抵之を截り去るなり、眼は小に、胸は深く、膈は圓し、前肢は垂直にして筋肉に富み骨太にして強堅に、趾跖は厚く圓形をなして遠路の馳走に適し、後肢は「ブルドッグ」の如く踵小にして地に近くあり、尾は細くして鞭の如く、體毛は密生して短く且細し而して一般の姿容剛壯にして逞しく見ゆ

ハ「グレートデーン」或は「ジャアマンドッグ」(Great Dane or German dog)

此種は時代及國處によりて其名稱を異にす「ウルマードッグ」(Ulmendog)「グレートデーン」「ボアハウンド」(Boarhound)「フアングハウンド」(Fang Hound)又は「アルトドイッチェドッグ」(Altdenteche dog)などと

呼ばれたるも皆異名同種なり而して此多くの異なる名稱は  
 少なからず錯雜誤解を生ぜしめたるが如し  
 千八百八十七年發行の「イラストリイルテ、ツァイツング」に「ダニシ  
 ドッグ」(Danish dog)、「グレートデーン」と「イングリシ、マステフ」の關係  
 を述べて曰く「ダニシドッグ」は「イングリシ、マステフ」に酷似せるも  
 其脛脚及趾跖は善く發達して純血の「マステフ」よりは迅速なる  
 馳走力を有し其舉動亦活潑なり而して此種類の最正しき形態  
 の者は「プロホルム」なる州より四五十年前に出でしを以て遂に  
 「プロホルムドッグ」などの名稱も與へられたり然れども此「プロホ  
 ルム」は實際の「ジャアマンドッグ」とは少しく形態を異にせる所あ  
 りたりと云ふ要するに「ジャアマンドッグ」は其形態餘り重大なら  
 ず又輕小にもあらず中位にして「グレイハウンド」と「モロサス」と

の中間にあるものなり  
 此種の原種につきては審ならざるものあれども其古くより生  
 存したりしものなることは明にして紀元十世紀の頃に獨逸に  
 存せし犬種は凡そ七種を數へられ其中 *Canis Poraifus* (ポアフン  
 ド) と呼ばれ放飼せる豕を捕ふるに用ひしもの) *Canis Ursarius* (ウ  
 ーア、キヤッチャア) と稱せられ熊又は牛を捕ふるに用ひしもの) 及  
*Veltris Leporalis* (グレイハウンド) 及「ヘヤハウンド」等を總括す) 等が  
 「グレートデーン」の曩祖なりと唱へらるれども更に精細に其原  
 種を究覈すれば其祖先は *Canis Molossus* なること復た疑ふべから  
 ざるが如し此「カニス、モロサス」なる種類は今全く絶滅せるも  
 紀元前三百五十年アリストートル (Aristotle) 氏の「ヒストリア、アニ  
 マリア」(Histria Animalia) にも記載せられたる古き種類に係り其性

質の勇猛なる之が三頭の群あらば以て容易く猛熊を斃すべく四頭の群は兇獅と闘ふて能く勝を制すと云へり古代の羅馬人は此種を闘争せしめて一の娛樂に供したりと傳ふ然るに此犬種は八世紀には猶ほ存在したりしも十二世紀顯理二世の時代には既に滅絶して「マステイフ」なる種類之に代りて出でぬ而して又此「カニス、モロサス」は今日存する「パッグ」(Pug)「イングリシ、マステイフ」(ジャアマンドッグ)及「ブルドッグ」等の祖先なるが如し犬種中にありて最高尙なるは恐らく獨逸種の「グレートデーン」の右に出づるものなかるべしとは獨逸人の常に誇稱する所に於て其體軀の雄大なる遙に他種に秀絶し平均三十四吋より三十八吋位の高を有し舉動活潑歩行寛濶にして姿容華麗に偉風あり其眼光の炯々たるは勇敢を表せると同時に知能の鋭敏と

性質の穩和なるを示し其深廣なる胸部と筋肉に富める長き脛脚とは馳走の迅速なるを知るに足り其體軀の短きと被毛の粲々たる光輝を有するとは其美容をして倍美ならしむ此種は其性質穩順にして剛強沈着而して能く兒童に馴れて之が侶伴となり又侵入者を防禦して主家の財産を衛護するの勇は番犬としての良性習を備ふと云ふべし

「グレートデーン」は現今にありて三種の異なる毛色あり一は虎斑を有するもの、一は白又は灰色又緑黒色の地色に黒、灰又は緑黒の點紋を有するもの、他の一は種々なる單色のもの是なり是は唯其毛色の異なるのみにして形狀に大小あるなく骨格狀貌差ふ所なければども單色のものには時に普通のものより體毛疎薄にして細く且尖りたる頭を有するものあり又大に「グレイ

ハウンドに似たる形態をなせるものあり一般の形態は重大なるも「マステイフ」程にはあらず寧ろ「グレイハウンド」に肖似し頭部長くして前頭稍高く雙眼の間深く凹溝を存し、上顎は幅廣くして強固に下顎は上顎よりは約十六分の一時許突出せり、頬は筋肉善く發育し、鼻は大に、眼は小に圓くして其光鋭く、耳は「グレイハウンド」の如き形をなし普通其狀貌を壯威ならしむる爲に截斷せらる、頸は長く筋肉に富み甚強堅にして稍彎曲し歩行に當りては高く首を揚げて威風を示す、胸は深さ其廣さより大に、背の長は高に比して長短なく、腰は穹狀をなして尾の方に低く、尾は長くして踵に達し根部太く先端細くして少しく上方に彎曲す若し感動することあれば一層彎曲せしめ歩行する時には背の水平線の高に之を揚ぐ、前肢は垂直にして膝は地に近くあり

肩は稍傾斜し、後肢は筋肉に富みて踵は地に近くあり、跗は大にして圓く、趾は穹狀をなして趾間密接し、爪は強固にして曲れり、體毛は甚短く硬くして厚く密生せり、體重は牝犬にて百斤以上、牡犬は百二十斤以上あり、地面より肩先までの高は牡犬の最小なるものにて三十吋、最大なるものにては三十八吋に達し牝犬は二十八吋以上なり

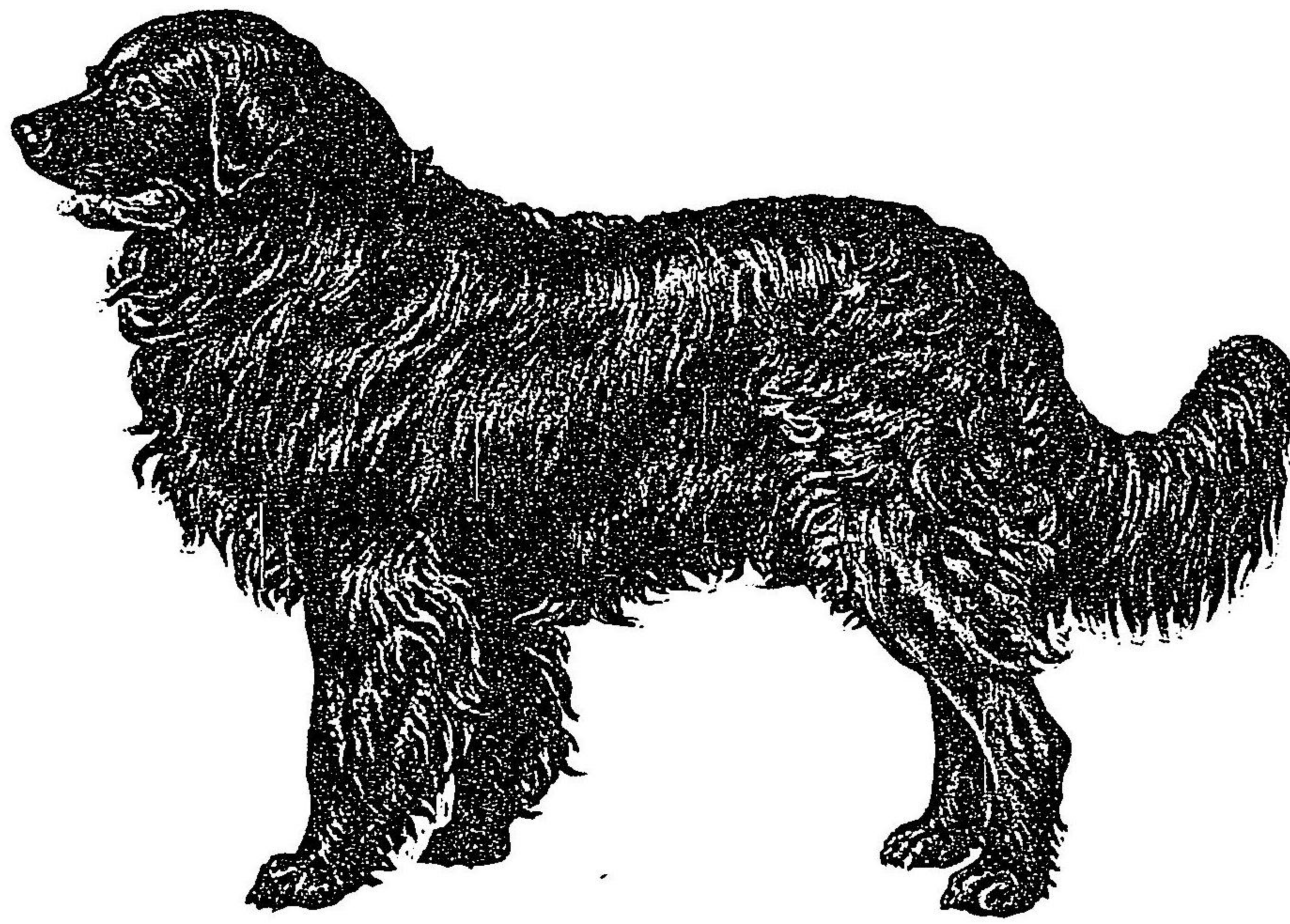
此種は獨逸にて「テキゲルドグ」(Tiger dog) (虎犬) と呼ばれ其形體も偉大なるを以て獸獵犬として虎を捕獲するに適するものなるべしなど想ふ人あれども其は大なる誤にして只番犬として飼養せらるゝに過ぎざるなり又此種は其體毛非常に短かけれども能く寒冷の氣候に堪ゆるを以て之を寒地に飼養することは長毛種の犬を暖地に飼養するの困難なるよりも容易なりとす

### 九ニニューファウンドランドドッグ (Newfoundland dog)

此種は亞米利加の原産に係り性質順良にして知能の發達せることは遙に護羊犬の上にありて善く小兒に馴れて之を保護し又水中に游泳するの力頗る大にして小兒婦女等の水に溺れしものを救護したるの談話或は記録等往々に見聞する所なり故に海岸に碇泊するの小船又は河川を航行するの端艇に飼養して其積荷を守護せしむ

此種形體の大小體毛の長短により更に三種に區別せらる即ち左の如し

(い)亞米利加の東北部に於ける西班牙殖民地に産するものにして是れ此種 of 原種なるべしと思考せらる體軀稍小にして地面より肩までの高二五六吋體長は高より長く頭部大に雙



グッドドンラドンウアフューユヒ

眼の間廣く、眼は小なり、耳朶も亦小に懸垂せずして少しく起上れり、鼻は廣からず狭からずして恰好に、頸は太くして頑丈に、肢は強固にして小兒等の抱懸することあるも歩行しつゝ之を搬移し能ふ、跗は大にして扁たく蹠善く發育して水中に游泳するに適せり、全身硬き長毛を以て被はれ、尾は長くして少しく曲り、毛色は全身黒色なるものを貴ぶも時に黑白駁色のものあり又稀には赤褐色及黒色の小斑紋を有するものあり

(ろ)三種中體形の最大なるものにして高三十吋を超え其姿容何となく寛悠に見ゆれども一般の形態に異なる所なく只體毛は前者に比して長く且卷縮し毛色は全身黒色なるもの稀にして多少の白色斑を有す

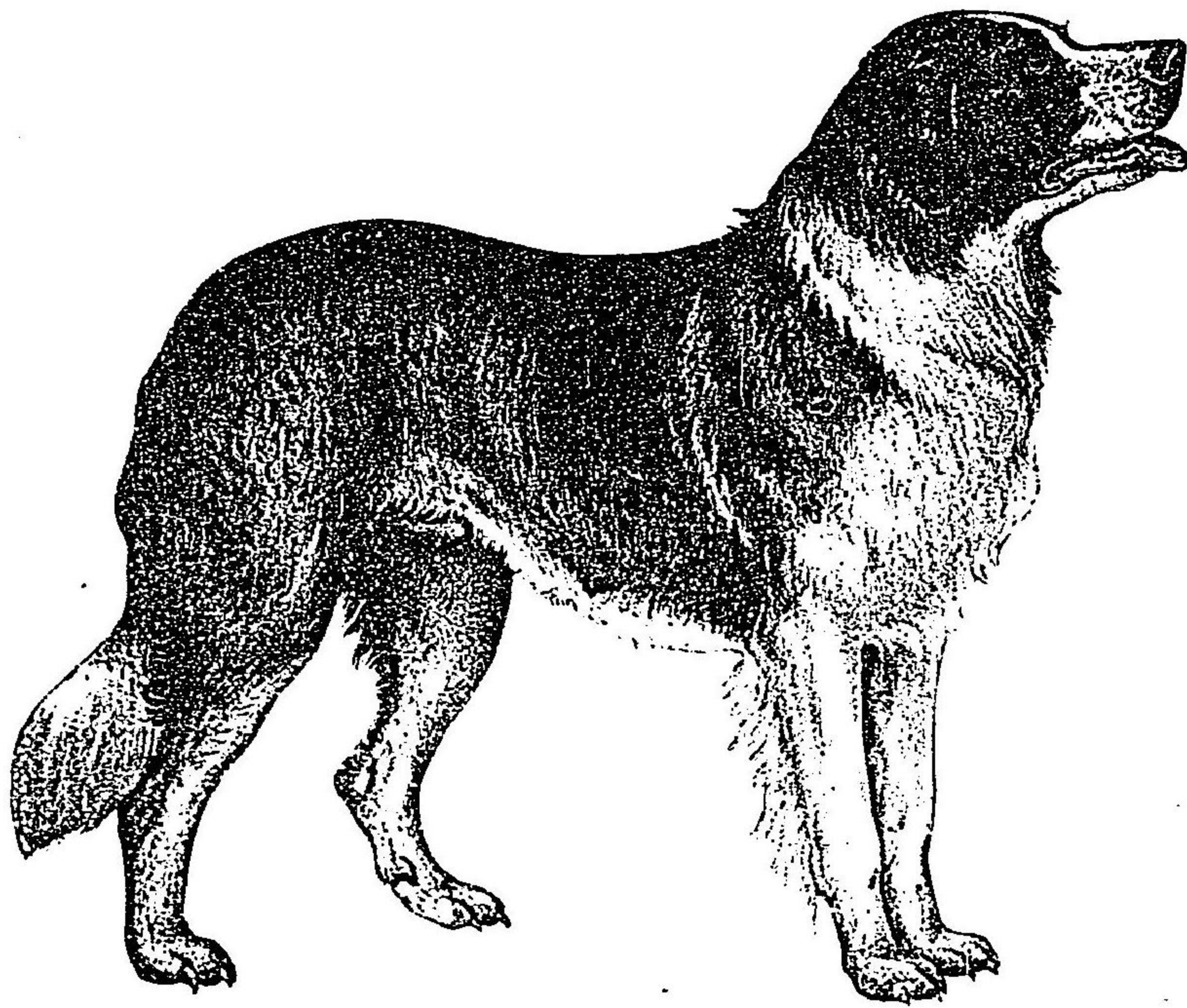


(は)三種中體形の最小なるものにして高二十二吋許體毛甚短く、  
 毛色は普通黒色なるも稀には赤褐色のものあり  
 此ニユースランドラント、ドッグ種は一般に他の同等の體格を有  
 するものに比して體量重しとす是は其力量の大なるに因るな  
 り被毛は長くして寒濕に抵抗するの力強く其性質穩順にして  
 嗅覺も敢て頑鈍ならざるが故に各種のものと雜種して善く其  
 良質を遺傳せしむ

十「セントバアナードドッグ」或は「アルパイン

ドッグ」(St. Bernard dog or Alpine dog)

瑞西國に於ては十世紀の頃にありて既に此種に関する記録あ  
 るも其が果して正確のものなりや否は明かならず然れども此  
 種がアルプス山嶺に設けられたる寺院の僧侶ホスピース(Hosp



グッドドーナートンセ

picé) 氏及シンプロン(Simplon)氏によりて飼養せられたりしのこととは實なるが如し口碑に據れば同寺の僧 St Bernard de menthon 氏デンマークドッグ(Denmark dog) (ブルドッグ)の一種の牝と「ポレニースマステフ」(Pyrenees mastiff)(羊犬)の牡とを交配して一種の形態を有する仔犬數頭を得たりしが是ぞ今日のセントバーナードの祖先にして當時是等數頭のことを訓練して四時白雪に埋れるアルプスの峻嶺を越ゆるの旅人にして路を失して彷徨する者或は凍死せんとする者を搜索して之が東道をなさしめ又は之を警報せしめて救護するの用に供したりしなり即ち老幼二頭を以て一隊となし一隊を伊太利に接せる方面に、一隊を瑞西方面に派して日々に九哩内外の地域を搜索せしめ若しも疲勞と寒氣に惱まされて臥伏せるの旅人を見出すあらむか一頭は寺院

に走りて之を報じ一頭は旅人の側に留まりて喧々吠えて注意を喚起し顔面手掌等を嘗め且温を與へて之を救護す而して此犬は積雪數丈に及ぶも決して道を失ふことなく可憐にも山腹の各所に設けられたる避雪場を巡視して旅人の有無を檢し避雪者を發見するときは直に之を導きて寺院に誘ふなりと云ふ人類にも劣らざる感頌すべきの動作ならずや

此種の形態は十九世紀の始頃のものと今日のものとは大差なく只今日にては長毛のものと短毛のものとの二種を成せり而して彼の寺院にては短毛種を貴びて之を飼養すといふ蓋し長毛種は降雪の時被毛凍結して氷塊をなし爲に諸種の疾病を起し時に或は凍死することあればなり然るに一千八百十三年にアルプスに起りし大雪積は此人命救護の任を盡す尤尙ぶべきの

犬種を壓殺絶滅せしめむとせしも幸に其以前寺院よりして山下の一小村に譲與せし仔犬の一番ありしを以て之を寺院に牽き還らしめ蕃息して今日に其子孫を存續せりと云ふ

(い)短毛種 容形偉大にして丈高く筋骨逞しく頭部大にして幅廣く顛頂骨稍發育して前頭は鼻梁と直角をなし雙眼の間深く凹窪して頭頂に至るに隨ひて漸く淺く額部の皮膚は高く鬣積をなせり鼻梁短くして眞直に鼻孔は大に幅廣く唇の如くして褐色を呈し、上唇は深く垂下し知能發達して愛情あるの相を表はし、頸は甚太く圓くして多大なる垂肉を有し平常は肩と水平或は少しく下げて之を保つも一たび感動するあれば直立して高く首を揚ぐ、肩は幅廣くして斜に筋肉に富み、胸は深きも膝より下に下ることなし、背は甚幅廣く、腹部は胸

部よりも稍細れり、尾は太く長くして先端も亦餘り細尖ならず而して先端に近き三分の一の處より上方に彎曲せり、前肢は太く頑丈にして垂直に、後肢は踵にて屈曲し一個或は二個の距爪は通常のものよりも低く存し趾蹠と同一平面にあり是は雪中を歩行するに當り蹠部の面積を大ならしめて體の没入を支ふ然れども距爪の後肢の内側に存するものは此用をなさざるなり、體毛は厚く生じて平滑に尾部の被毛は根部にては長く先端に至るに隨ひて短し、毛色は白色と赤色との駁色にして赤色の單色又は全身純白のものなし、高は牡犬にて三十吋、牝犬にて二十八吋以上あり、體重は百五十斤より二百斤に及ぶ

(ろ)長毛種 被毛稍長けれども卷縮又は波狀をなさず只背部に

於て少しく波狀をなせるを見る尾毛は長けれども「セッター」の如くならず、顔面及耳朶の被毛は纖軟に又耳の根部に長毛あり、前肢の後側の被毛は左まで長からざるも臀部の被毛は長し  
其體格形狀に至りては長毛短毛兩者共に少しも異なる所なし

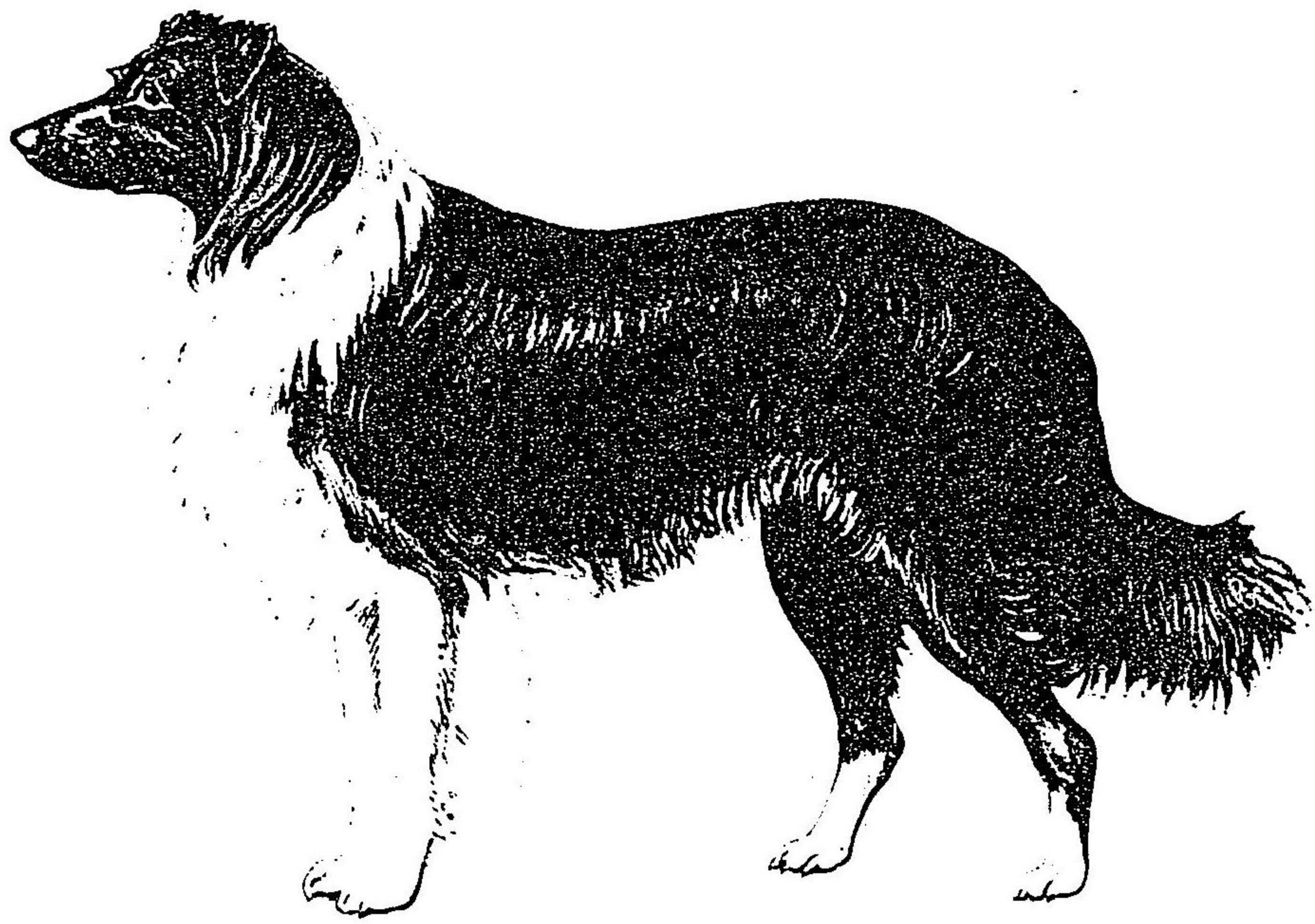
此「アルパインドッグ」は其性敏捷にして勇敢なるも又從順にして小兒の同伴となり善く之が保護をなし又時には靜に小兒の乳母車を牽輓する等眞に可憐の働作をなす  
此種は元と寒國に生育したるものなるを以て氣候稍暖かなるの地に參養せむことは頗る困難なり故に我東京の如き氣候にありては夏時は深く地中に簪を穿ち其内に起臥せしむる等の

注意を施さざれば充分の成育を見ること難しとす

### 十一「シェパードドッグ」(Shepherd-dog)

所謂護羊犬にしてヴ・ホン氏は此種こそ今日存在する所の有らゆる犬の祖先にして其未だ改良せられざる形態を具有せるものなりと云へり而して護羊犬なる名の示す如く羊又は牛の守護に用ひられ又時に「コルリ」<sup>1</sup>と稱せらる「コルリ」(Collie)とは「カラー」(Collie)の意にして其頸を周りに白色毛の環状をなせるありて其状「カラー」に似たるを以てなり

護羊犬の才能は「ニューファンドランドドッグ」に劣るも注意深く且忍耐力の強きは以て能く長時間の役務に服するに足り其形容の穩良に舉止の沈着にして秩序的氣風を表示し生命を奉じて善く羊群を誘導して外敵を防禦し或は廣漠なる原野に馳驅



グッドボーアフヘシ

して散在せる羊群を糾合し或は大群中より一小群を分割し又は羊群を導きて朝に牧場に誘ひ夕に之を羊舎に送る等の才能は飼羊者にありて實に一日も缺くべからざる羊群の守護者たるなり然れども神經過敏にして銃聲又は雷鳴にも驚怖逸走するを以て狩獵に用ゆるに適せず先天的羊群等を守護するの才能を有するものなり

形態は高二十四時を超ゆるもの稀に頭部は扁たくして稍廣く、鼻は長く顎は先端尖り、雙眼は相離れて少しく斜に位置し、頭部の皮膚緊張して微しも緩みなく、耳朶小にして直立し其先端稍前方に傾けるものあり驚怖するときは耳朶を後方に伏せて頸の長毛中に隠蔽す、頸は稍長くして彎曲し筋肉善く發育せり、胸は深くして前面は其幅狭きも肩の後方にては廣がり、背は太

くして短く、腰は穹状をなして肩よりも稍低し、前肢は垂直にし、て頑丈なり、跗は厚く趾は穹状をなして曲り、後肢は臀部より踵までの間殊に長く、尾は長大にして先端稍上方に曲れり、而して其歩行する時にも低く垂れて決して上に揚げず、間には後肢に一個或は二個の距爪を有するものあり

此種に體毛の長きものと短きものとあり、長毛のものは降雪深き地に於ては雪塊體毛に氷結して歩行を困難ならしむるも亦能く寒濕に抵抗するの力あり、短毛のものは長毛のものに比すれば其被毛短しとはいへ「ポインター」の如く最短なるにあらず、且冬期に至れば體毛幾分か長生するを見る、兩者共に二様の體毛を以て被はれ、上面の毛は較太くして長く、下面の毛は細短にして殆んど皮膚を見得ざる程に密生せり、何れも四肢の被毛は

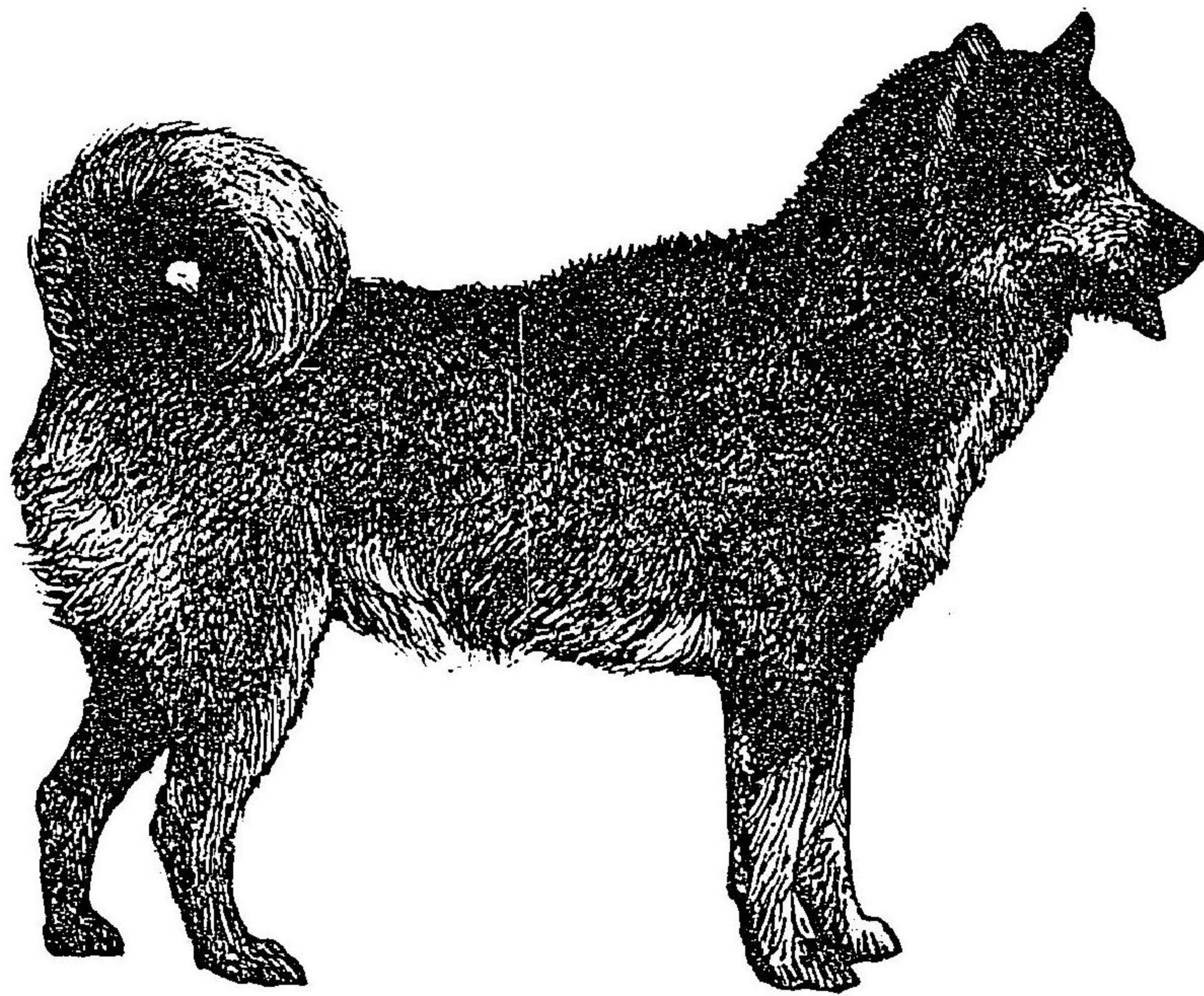
短く、長毛種と雖も膝以下には短毛のみなり、毛色は黒色にして胸部より腹部に亘りて黄褐色を暈し、又四肢にも同しく黄褐色を呈せるもの最貴ばる之に次ぎては黒色にして腹部に白色の紋様斑擴がり、其黒白の界に黄褐色を有するものを貴べり、間は黒白斑又は狐色と黒色毛との混生せるものあり

護羊犬の一種にして蘇格蘭及ウエールスにあるものは「ボップテイル」(Bobtaile)と呼ばれて短尾否殆んど尾を有せざるものあり、此種は通常のものに比し體軀稍短くして且圓く、體毛粗硬にして長く稍卷縮し、頭頂に長毛ありて額部を蔽へり、又四肢にも趾蹠の上部まで長毛密生せり、故に趨歩通常のものより速かならず、又尾を有せざるが爲に回轉敏捷ならざれども山嶽地を緩歩するに適し、毛色は黒及白の駁色にして又灰色なるものは多少

純白の點紋あり此種は通常のものより其性稍粗暴なりとす

十二エスキモードッグ (Esquimaux dog)

是は強健なる種類の一に數へられ高二二三吋體毛は長くして稍卷縮し尾は太くして背上に卷揚り長毛を以て被はる顔面及四肢の膝より下部の被毛は短し一般の狀貌狼に似て其耳朵の直立せるものと前方に屈曲せるものとあり毛色黒白の駁色にしてラブラード海岸に棲息するものには褐色及白色のものあり性質敏捷にして忍耐力に富み馳走の速度大なり又力量強くして善く重荷を積載せる橇を挽き且勇敢なるを以て狩獵にも使用せらる亞米利加の北部にては狩獵に赴くとき諸多の物品を積みたる橇を挽かしむるに此種を用ひ七頭より十二頭を一隊となして橇車に結ぶときは能く百十斤以上の重荷を牽



グッドーエスキモエ



くに堪ゆ之を御するには手綱によらず只人の號令によりて自在に左右す故に先頭に老練なる一頭を置き主人は一本の鞭によりて之を御するなりといふ

夏期は主家を離れ野に出で、自由に食を求めて生活し冬期野に採るべきの食餌なきに至れば復た主家に還り僅の魚肉により養はれて挽櫓の勞役に服す然れども夏時にも主家に在りて貨物運搬の勞を取るものあり

露領西比利亞にも之と同種類のものありて同じく櫓を挽くの用をなす然れどもトボルスクより東部又は最北部には飼養せられず

### 十三、日本犬 (Japanese dog)

我國は經濟發達の沿革歐洲大陸と異なりて狩獵時代なるもの

を經過せず又遊牧の民なく神代に於て一部の人民弓箭によりて鳥獸を獵獲したりし的事实ありと雖も狩獵を以て生活をなすの手段となせしにあらざして農業の傍ら山澤に獵し或は單に遊樂として之を試みたりしに過ぎず故に獸獵又は家畜保護の爲に犬の必要を見ざりしなり

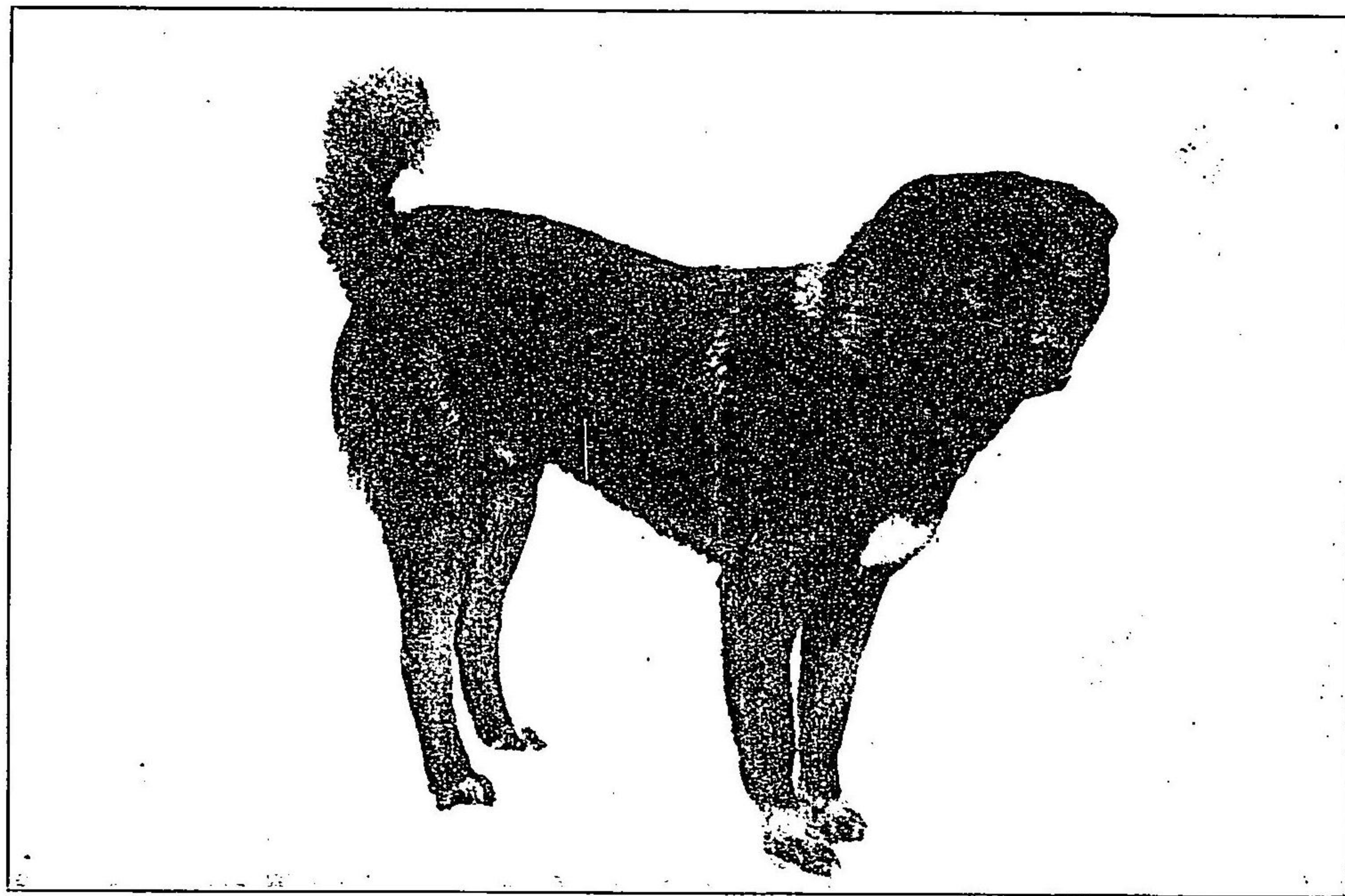
史を按ずるに仁徳天皇四十三年(西曆紀元後三百五十五年)百濟酒君鷹を獻ず是れより鷹甘部なるものを置き飼鷹を掌らしめ玉ひ鳥獸の獵漸く盛に行はれたりしかども未だ犬を使用するに至らず鷹獵以外の獵法としては重に陷笄張網又は弓箭によりしなり其後二百年を経て欽明天皇十三年佛教の傳來以後其教旨の肉食を禁斷せるよりして佛教の漸く弘まるに従ひて狩獵も亦衰頽を來せり然るに桓武天皇の朝に至り天皇狩獵し玉



(犬獵産田秋) 犬 本 日

ふこと二十年間に百四十回の多きに及びり而して平安朝時代の武人の娛樂中走狗放鷹の舉ありしを見れば此時代に於て既に飼養犬のありしは明にして又多少狩獵にも用ひられたりしものゝ如し宇多天皇の朝に至りては盛に犬を用ひて狩獵をなし又婦人の犬猫を愛玩飼養するものあるに至れり然れども此等の狗が果して日本在來のものなりしや將た三韓より輸入せられしものなりしやは明晰ならず加之これが飼養とても敢て改良淘汰を行ふことなく只自然の繁殖に放任したりしなり然れども我國の版圖たる南北に長きを以て南部の温暖北部の寒冷を包有し又東西兩地の其温度を異にせるあり長き年月の間犬の形態に彼此の相違を生じ各地特有のものを産するに至り又地方によりては近世に於て多少の人爲的淘汰を行ひ其特性

を遺傳せしめ天城地方の楊木犬秋田の猪犬或は鹿兒島の鬼犬高知の闘犬の如きものを生ずるに至れり一方に於ては徳川時代の中世慶長年間和蘭葡萄牙等との貿易互市により外國種犬の長崎に入りしものあり之を唐犬と唱へて漸く各地に廣まり遂に日本犬に外國種の血を混ざるものを生ずるに至り明治の年代に及びては外人の我國に居住するもの漸く多く従ひて其伴ひ來る所の犬は其子孫を汎く各地に分布し又一時盛なりし西洋崇拜の狂熱は畜犬にまで之を及ぼし洋犬を愛育して日本犬を斥けしめ之に加ふるに軌近銃獵の盛なるよりして貴紳豪商の特に外國より各種の獵犬を輸入するもの漸く多く是等的關係相綜合して結果を生じ僅々四十年の星霜を閱たる今日に於ては純粹の日本犬は纔に山間僻陬の地に之を飼養せらるゝ



(犬國産田秋) 犬 本 日

のみにして都市近郊には之を見ること殆ど稀にして稍日本犬に近き形貌骨格を有するものもありても幾分外國種の血を混ぜざるものなきに至れり

形態は頭部扁たく幅廣く厚くして眼邊に至るに従ひて狹まり、顴骨重大に、顎は先端頗る尖り、鼻梁短く鼻端及口唇は黒色なり、耳朶は小にV字をなして頭頂に兩耳相離れて直立せり、頸は短くして太く、肩は稍斜にして肥大に、胸部は圓くして幅廣く、尾は太くして背上に卷揚ぐ、前肢は垂直に、後肢は股骨彎曲し、踵は地に近くあり、跗は圓く厚くして其體に比して小に、趾は高まりて穹狀をなさず、體毛は地方により長短の差あるも概して顔面四肢及耳朶を除くの他は粗硬に稍長くして密生し、尾部の毛は密に厚く生ぜるを以て太き尾をして一層太く見せしむ、毛色は多

くは黑白斑なるも或は黄褐毛又は黒毛を混ざるものあり體の高は小なるものにて十四吋大なるものは二十吋を超ゆるものあり性質勇邁にして少しく粗暴の風あり率ね争闘を好み又能く主家を保護すれども之を訓練すること困難なり鹿兒島の鬼犬秋田山形の猪鹿犬は有名なるも其養主の命により働作すると云はんよりは寧ろ己れの慾望を充さんが爲に働くものゝ如し爲に屢犬なる失錯を致すことあれども其勞役に従事する間の執念は他種に優るも劣らざるなり故に適當なる訓練を施せば最良なる狩獵犬となるべく又適法なる人爲淘汰を行はゞ形容華麗なる愛玩犬を得らるべきなり殊に古來風土に馴化し感受し得たるの特性に至つては他洋種の及ばざる所なり余は他日進



グッドンヤニラメホ

みて此研究をなさむことを期す

#### 十四「ポメラニアンドッグ」(Pomeranian dog)

獨逸にては「スピッツ」(Spitz)と稱し其原産地に於ては羊の擁護に使用し又河川を航行するの船舶中に飼養して其財貨を守護せしめ又農家は此種を飼養して以て家財の安全を計ると云ふ形態は小にして鼻尖り、頭部は扁たくして大に、耳は直立して三角形をなし、頸は短太に、胸は圓く、背は短くして幅廣く、尾は多毛にして背上に巻揚り、體毛は長くして密生せるも些も巻縮せず、四肢及顔面は短毛にて被はる、毛色は普通白色なるも又白及黒の駁色又は淡黄色のものもあり一般の形容は前種日本犬に髣髴せり

亞米利加に「シップアーク」(Shipperke)と呼ばるゝ一種ありて白耳義

の原産に係り本種とは相異なれりと云ひなせども詮ずるに同じく「ポメラニヤン、ドッグ」なるが如し只其尾は普通之を切斷せらる

#### 十五「ヌートカドグ」(Nootka dog)

此種は亞細亞の原産にして形態肥大に前種に相似て尖りたる耳は直立し口端尖り頭部大にして性質順良なり體毛は厚く生じて長く其色は白黄褐色又は黒色なり毛質纖軟にして羊毛に類せるを以て土人は之を刈取りて羊毛に混じ衣服を織るに用ゆと云ふ

#### 第四節 愛玩犬

愛玩犬は多くは室内に飼養して觀賞用に供するものなるを以

て體軀小にして外觀美良に性質穩順にして知能善く發達せるものならざるべからず愛玩犬とても室内に在りて番犬の用に供せられ又は鼠を捕獲するの特性を有するものあれども屋外にありて邸宅を守護する所の番犬とは其使用の目的自ら異なるものあるを以て彼と此とは其類屬を別にせり

#### 一「ターキシングレイハウンド」(Turkish Greyhound)

形態「イングリシングレイハウンド」に酷似して只形態小に體毛纖軟にして短く粗に全身を被ひて殆んど其有無を辨ずべからず、性質穩順に過ぎて狩獵に適せず

#### 二「エジプシヤングレイハウンド」(Egyptian Greyhound)

體形「ベドウィンングレイハウンド」(Bedwin Greyhound)に似て體軀稍



短けれども亦小形ならずして英國種程の體大を有し其皮膚は薄弱に、毛色は黑白の點紋散布せり

### 三、イタリヤングレイハウンド (Italian Greyhound)

是は伊太利、西班牙等の如き氣候温暖の地に養はれ其體軀矮小にして馳走速かなれども勇氣に乏しくして兎の如き敢て抵抗することなきの者だも捕獲し能はざるなり故に他の「テリヤ」種と雜種し強壯にして速力の大なるものを得て之を使用することあり、されども之が純粹種にありては全く愛玩用に過ぎざるなり形體は「ターキー」種に似て體毛稍硬く、毛色は光澤ある金鹿毛のもの最賞揚せられ之に亞ぎて愛賞せらるゝは淡黄色のもの又は全身鹿毛にして口端の灰色なるものなり其他赤褐、黄褐、白黒等のものあり、體重は通常六斤乃至八斤にして十二斤以

上のものは殆んど愛養せられざるなり

### 四、ブレンハイム及キングチャールススパニエル (Blenheim and King Charles spaniel)

此兩種の起原は不明なるも「スパニエル」系統に屬することは明にして又「トリスパニエル」(Toy spaniel)の名あり而して英國にてはキングチャールス二世 (King Charles II) 之を賞翫愛育せられたるより各國に相傳へて遂に其名をなすに至れり

米國の或書に據れば「キングチャールススパニエル」は其初め日本より輸入せられたるが如し又「ロバート、フォーチュン (Robert Fortune)」氏が千七百年代に日本を遊歴したる日記中に記する所によれば日本の愛玩犬は他國人にも亦大に賞揚せられ其形體矮小にして體長九吋或は十吋以下なり、其鼻は前より壓平

せられたるが如き形をなし眼は奥深く其姿容美と謂はんよりは寧ろ奇と謂ふべきなり而して日本に於ける此種の飼養育成には注意周到なるものありて其形の純正なるものは高價に賣買せらる又曰く其體軀の矮小なるは仔犬の時より日本にて醸造せらるゝ一種の火酒を少量づゝ飲用せしめて其發育を抑制するに依るとアイドストーン (Idstone) 氏は言へり余が日本より直接に輸入せられし二頭の愛玩犬を見たるに眼大にして眼光炯々形態キングチャールズスプニエールと酷似し唯其耳朵小なるの差異あるのみにして其他は全く彼と一致せるが如し而して其毛色は淡黄と白の駁色にして毛質纖軟一種の光澤を有せり氏又曰く「キングチャールズスプニエール」が日本より輸入せられしの一證とし見るべきは「キングチャールズスプニエー



ルーエニパススルーヤチグンキ及ムイハンレブ

ル」を飼養する者が其體軀の矮小ならむことを望むが爲に杜松子酒を與ふること、是なり是れ恐らく日本より其犬種を輸入したると同時に日本にて酒を與ふることをも傳聞して之に倣ひしならむと而して氏は結論して曰く犬の體軀の矮小ならむを望むが爲に酒を飲用せしむといふは誠に愚なる考なれども動もすれば無意味に倣ひ倣されむ事どもなり「キング、チャールズ、スパニエル」が日本の愛玩犬と形態相酷似し且其體軀を矮小ならしむるといへる方法も東西相一致せり之が同一原種より導かれしにあらずとせば實に奇異なる一致と謂はざるべからずと

以上諸氏の説く所の日本愛玩犬とは即ち今日我國にて漸々其數を減じつゝある所の狎のことにして此狎なるものゝ飼養が

何の時代に始まりしか又如何にして我國に飼養せられ且改良せられしや詳明なる記録の存するものなし而して若し狎が「キング、チャーレス、スパニエル」と同一種而も後者の原種にして三四百年前に於て既に彼に移入したりしは思ふに其當時長崎に於ける和蘭人及葡萄牙人等の交通互市盛なりしを以て是等邦人の手を経て輸入せられ遂に英國に傳播せしならむか其歴史は如何なる経路を經來りたるにもせよ「ブレンハイム、スパニエル」及「キング、チャーレス、スパニエル」の二種は種々の名稱を呼ばれて古くより存在せし所の種類なりしなり兩種共に其知能は驚くべき程發達せるものにして一たび之を飼養せし人は孰れも嘆賞して措かざる所なり時に或ば人間に優れるの働作をなせしこと少なからず「アイドストーン」の報

告によれば嘗て此種の犬を愛養せる一婦人あり或時急病の爲に苦悶し家人を喚ぶの便もなき有様なりしに傍に在りし其が愛犬は主の苦痛の状を見て是迄に一たびも教へられたること無かりし所の呼鈴の紐を引きて之を家人に報じたりと云ふ斯く伶俐なるを以て之を訓練すること容易に能く諸種の技藝を習得し屋内にて小なる品物を其命ずる所に運ぶ杯の事を爲す又室内に飼養して善く番犬の用をもなし最微小の音聲をも聴取し直に吠えて之を報ずるなり形態は頭部半球状にして眼上の秀兀たる部は時に上向きとなりし鼻端と觸接することあり雙眼の間相隔たり眼瞼の兩端即ち上下の眼瞼の端を結べる直線は鼻梁と直角をなし眼は圓大にして黒色なり眼球の餘り大なるが爲に常に涙を出しつゝあ

り是は涙腺の發育不充分なるによる、兩眼の間は深く凹窪し、鼻梁は短く、鼻は其色黒くして先端上方に反轉し前方より壓平したる如きの形をなし、下顎は幅廣くして上方に曲り上顎の口唇と密接し、耳は頭部の下方に近く付き、耳朶は長く地上に達する位にして此種普通の形大のものにて耳の長二十吋以上二十二吋に達するものあり且頗る長き毛を以て被はる、其耳の長は「キングチャールス、スパニエール」は「ブレンハイム、スパニエール」より長くして時に二十四吋に及ぶものあり、體重は兩者共に十斤以内のものを貴ぶ、形體は略「バッグ」に等しけれども其體毛の濡れたるときは「バッグ」よりも小なり、胸は廣く、背は長さ短くして幅廣く、肢は強固に、體毛は纖軟にして長く光澤ありて波狀をなし「ブレンハイム、スパニエール」にありては胸に許多の長毛を有

せり、又兩者共に肢及耳に長毛あり、尾毛は根部より先端に至るまで長くして方形の旗狀をなし其歩行するや背の水平線と同じ高に之を揚ぐ、されど尾は普通二寸五分乃至三寸許に之を截去るなり、毛色は「キングチャールス、スパニエール」は光澤ある黒と黃褐色の斑にして眼上、頬及肢には少しく白色の點紋あり「ブレンハイム、スパニエール」は光澤ある白色に暗褐色又は赤褐色の斑文を有せり

#### 五、狎 (Chin or Japanese pug)

「キング、チャールス、スパニエール」の項に詳述せる如く多くの人は狎を以て日本の原産なるが如く稱するも何の年代より我國に存在して如何に改良せられしか明晰ならずと雖も二百五十年乃至三百年前に於て既に存在したりしことは明なり

形體は小にして體量三百目以内のものを良種として貴べり一般の形容はキングチャールズスパニエルに酷似し頭部圓くして球狀をなし鼻梁短く其先端上方に反轉し眼は圓大にして下顎は上方に向ひ頸は短く肩は眞直にして前肢垂直に胸は深く背は平にして短く後肢は強壯に尾は短くして長毛を有し背上に卷揚げ密接せしめてバグの夫れの如し體は波狀をなせる細き長毛を以て被はれ耳朵は小にして長毛にて被はる此種は性質敏捷にして能く養主の命に従ふも他人の接近するあれば直に咆え且咬嚙す然れども善く訓練するときは諸種の技藝を演ぜしむべし其體質稍虚弱にして氣候風土の變化に馴れ難く産出地と風土の異なる地に移すが如きことあれば斃死するの憂ひありとす



### 六「マルチーズドッグ」(Maltese dog)

是は所謂(Bichon or Chien Bouffé of Buffon)といふ種にして小形の「スパニエル」中最古くより存在する愛玩犬の一種にして希臘の盛時には貴婦人の愛寵する所となり其後羅馬が世界を統一せるの時代にも亦大に賞玩せられしものにして羅馬の古き紀念物には往々に其影像を鏤刻せられ且希臘の地理學者ストラポ(Strabo)氏等の吟詩に入れり

體軀矮小にして體量小形のもの三百六十目、大なるものにて七百二十目に過ぎず、體毛頗る美麗にして室内に在りて婦人の傍に臥寝せるの様は絹絲の堆塊かとも疑はれ性質敏捷活潑なれども被毛の長きが爲に大に其働作を鈍からしむるものあり諸種の技藝を教練すれば能く之を習得す而して又前者と同じ

く養主には従順にして能く其命を奉ずるも見知らざる人の入り来るあれば直に咬噬して害を加ふ  
 此種も亦體質虚弱にして氣候の劇變に耐ゆるの力甚弱く殊に仔犬の時代に於ける生育困難にして其成熟期に達すること亦晩し且繁殖力弱くして一回二三頭の生産に過ぎず然れども既に成長したるものは強壯にして其生存期間長く「マステイフ」「セントバーナード、ドッグ」等に比すれば數箇年は命數長しとすされど體質虚弱なるが故に生後一箇年間は其飼養管理につき深く注意して恰も貴重なる陶磁器を取扱ふが如くすべし  
 體毛甚長くして光澤あり體重四英斤許のものにて六七吋の長毛鼻先より尾の先端に至るまで連生して眼及鼻口も爲に蔭蔽せらる故に食を與ふるに際しては口頭の周圍の長毛を兩方に

分け結ばざるべからず又體毛は仔犬の時より日々疎齒の櫛又は軟き刷毛にて充分梳刷せざれば體毛互に錯雜捲縮して其觀様をして醜からしむ頭部稍廣くして少しく圓狀をなせるも「トイスパニエル」の如くならず眼は前者の如くに圓大ならずして黒色に、顎は扁たく先端に至るに従ひて漸く尖り、鼻は黒色に、耳朶は小に薄くして褶伏せるも物に激するときは之を直立す、胸は深く、背は平にして筋肉に富みて寧ろ長き方なり、肢は短く垂直にして強固に、尾は美しき白色の總毛を有し歩行に際しては之を背上に卷揚ぐ、全身は純白雪の如き長毛にて被はれ、背の長八吋、高七吋位のものにて體毛の長十一吋に達す又毛色は白色なるを普通とするも間々耳部に黄色の斑紋を有するものあり

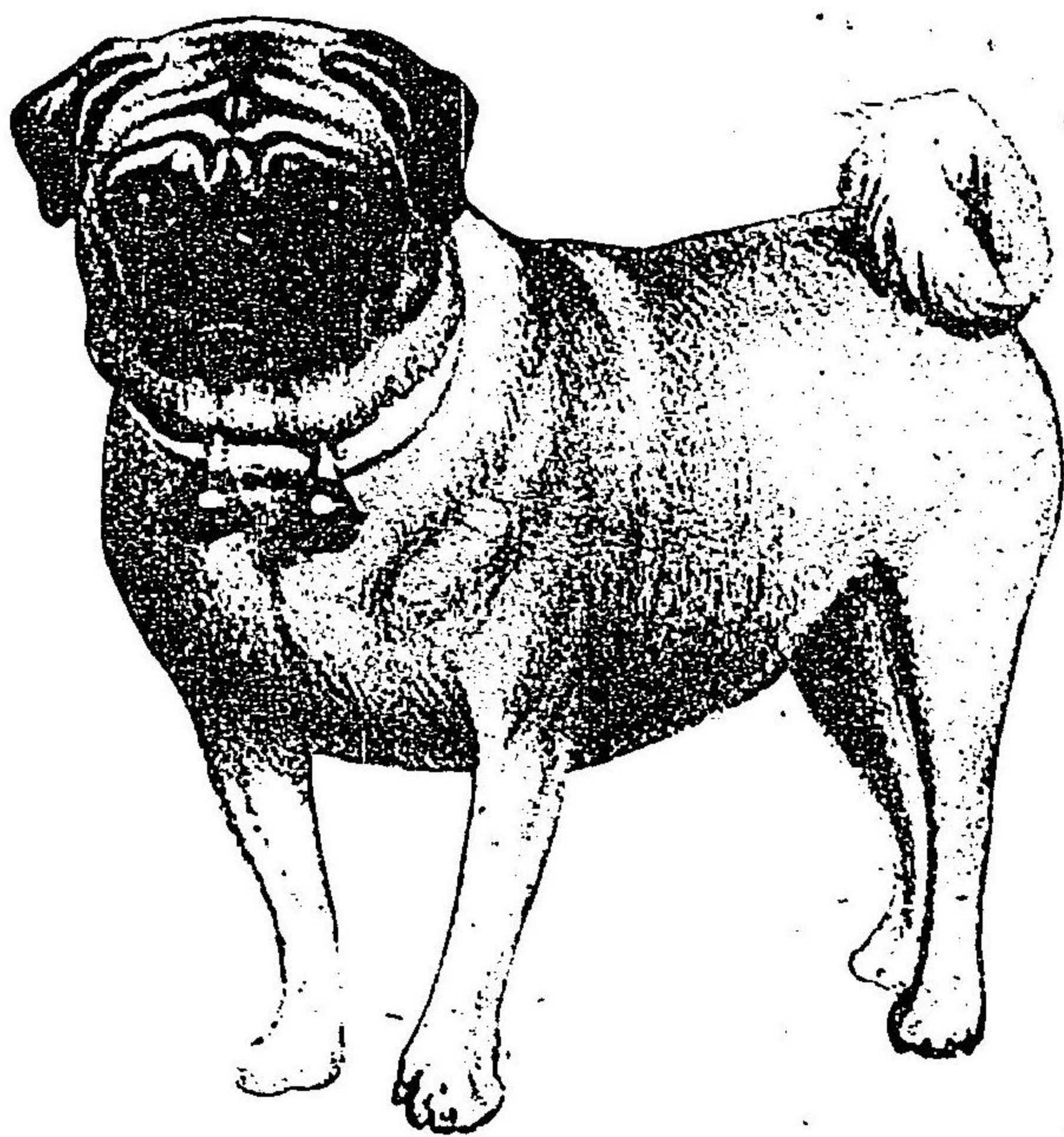


此種性質虛弱なるの故を以て之を飼養するもの鮮なく今日には其數漸く減ずるに至れり

### セパグ (Pug)

此種は其形體の「マステフ」に酷似せるより或博物學者は「マステフ」の小形のものなりと云ひ又他の學者は「マステフ」と「ブルドッグ」の雜種より出でたりとなし又或人は日本の狽と「ブルドッグ」の雜種なりと云ひ英國人は自國固有種なりと稱し其說紛々として一定せず

此種は全くの愛玩犬にして狩獵等の用に供し能はざるなり其性質穩順にして喜んで小兒の同伴となり決して抵抗する等のことなしされど其力量は強大なり體軀は小にして體量十三斤乃至十七斤あり頭部は大にして前頭凹窪なく鬣積多く存し眼



グ ッ プ

は黒色潤大にして光澤あり、耳朶は薄く軟くして天鷲絨の如く直立せるものと半立せるものとの二者あり、鼻梁は短く稍前方より壓平せられしが如き形をなし、顎は先端尖らず、口端方形なり、頸は短くして太く、肩は幅廣く、胸は深く廣くして圓形をなし、背も亦圓形に幅廣きを以て胸背の邊圓みありて短く見ゆ、腰部は筋肉善く發育して強固に、肢は太く短くして眞直に、足は稍圓形なり、尾は短くして背上に緊しく之を卷揚ぐ、被毛は纖軟にして短く密生して光澤あり、毛色は口の周圍は濃黒に又頭頂より尾の根部に至る一帯及肛門の周圍亦同色にして其他の部は灰色なり又間には赤褐色のものあり、肩より地面までの高は十一寸乃至十五寸あり

八「ベドリントン、デーリヤ」(Bedlington Terrier)

は黒色潤大にして光澤あり、耳朶は薄く軟くして天鷲絨の如く直立せるものと半立せるものとの二者あり、鼻梁は短く稍前方より壓平せられしが如き形をなし、顎は先端尖らず、口端方形なり、頸は短くして太く、肩は幅廣く、胸は深く廣くして圓形をなし、背も亦圓形に幅廣きを以て胸背の邊圓みありて短く見ゆ、腰部は筋肉善く發育して強固に、肢は太く短くして眞直に、足は稍圓形なり、尾は短くして背上に緊しく之を卷揚ぐ、被毛は纖軟にして短く密生して光澤あり、毛色は口の周圍は濃黒に又頭頂より尾の根部に至る一帯及肛門の周圍亦同色にして其他の部は灰色なり又間には赤褐色のものあり、肩より地面までの高は十一吋乃至十五吋あり

八ベドリントン、テールヤ (Bedlington Terrier)

此種は古昔より英蘭の最北端なるノーザンベルランド(Northernberland)州に存在する「テリーヤ」の一種にして今より凡二十年  
前より汎く世に知らるゝに至れり

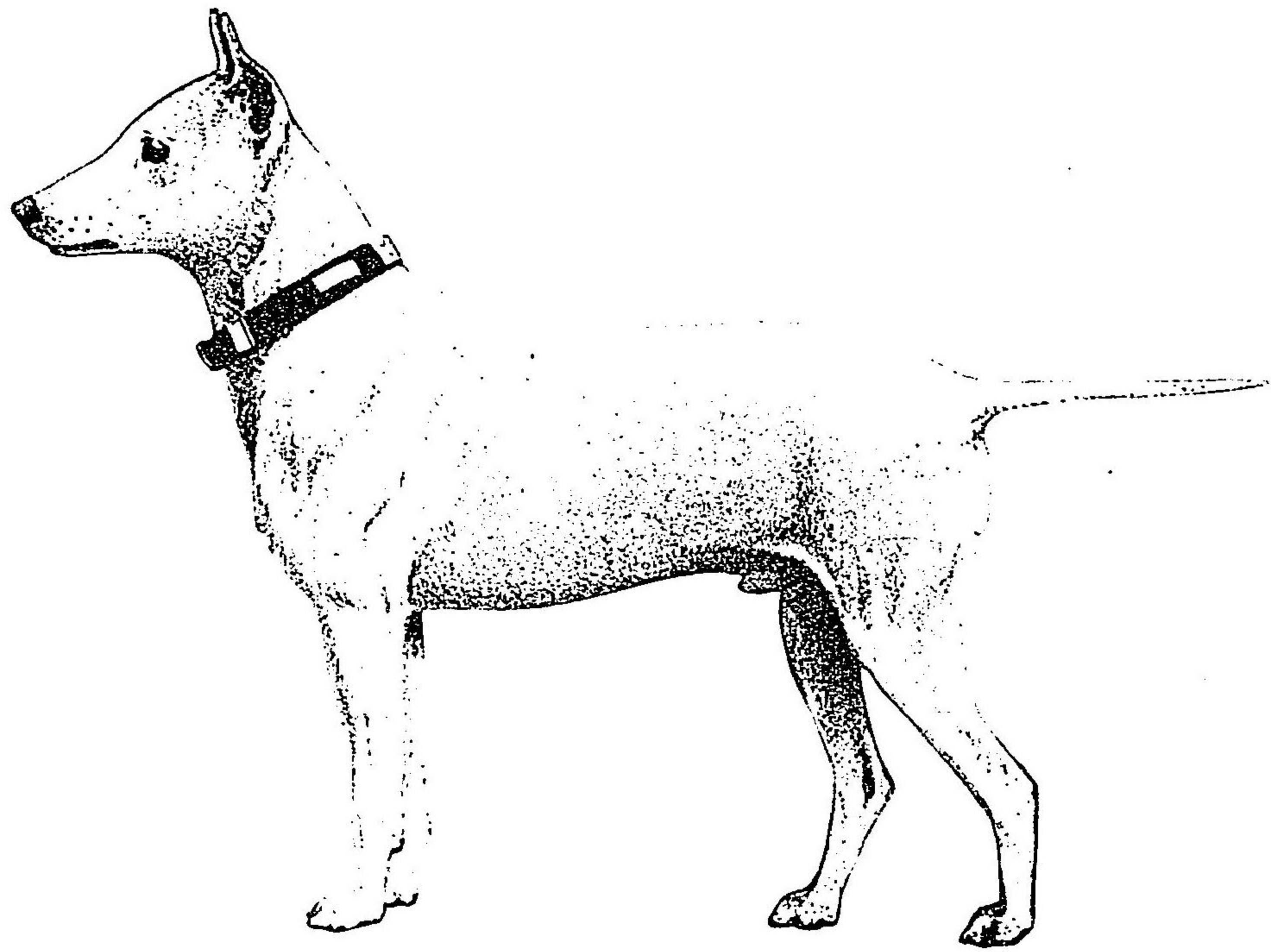
形態は頭部狭けれども厚く圓くして、顛頂骨高し、頭上に纖軟なる總毛を有せり、鼻梁は長くして先端尖り、前額は稍突出し、眼は小にして深く、體毛暗綠色のものは其色黒色に體毛赤褐色のもの、淡褐色を呈せり、鼻は大にして體毛暗綠色のもの、其色黒色に體毛赤褐色のものは其色肉色なり、耳は榛葉形にして稍大に頭部の前方に近く附き、頬に密接し其先端は細き軟毛にて被はる、肢は垂直にして其間狭く、頸は長くして肩に近き處にては幅狭く扁たく、肩は平に、體は長く、胸は深く、背は稍穹状をなせり、體毛は粗硬にして卷縮し長一吋許あり、毛色は暗綠色又綠色及黃

褐の駁色にして赤褐色のもの又は赤褐と黃褐の駁色のものもあり、肩の高十五吋乃至十六吋、體重平均牝二十二斤、牡二十四斤あり、全體細長にして輕捷に見ゆれども被毛粗硬なるが故に餘り美麗の觀を呈せず、性質勇猛にして或る時代には闘犬として之を用ひたりしことあり、然れども適當の教練を施せば自然穩順となりて善く、養主の命を奉じて敏捷の働作をなし、又知らざる人の近づき來ることあれば直に之を咬嚼す  
此種は元來小食なれば其飼料は少量にて足るなり

#### 九、ブルテリーヤ(Bull-Terrier)

是は其名の如く「ブル」と「テリーヤ」との雜種にして一千八百四十年の頃「ブル」と「ホワイトテリーヤ」(white terrier)とを交配して成出したりと、いふ此種も古は闘犬として用ひられ、性質穩良なれど

も勇敢にして忍耐に舉止又活潑なり懇到に飼養すれば能く養  
 主に馴ること他犬の比にあらず又老幼婦女の同伴となり室  
 内の番犬として侵入者を防ぎ且好みて家鼠を捕ふ  
 容姿華麗にして威風を示し體重は一定ならずして十五斤より  
 五十斤に及ぶ頭は長く平に雙耳の間廣く鼻の方に至るに従ひ  
 て狭り鼻孔は大にして黒色を呈し眼は小にして黒く口唇は淺  
 く稍やく齒を蔽へり耳朶は大抵之を截去せらる頸は長く稍穹  
 状に彎曲して肩の邊は太し膺は深くして圓形をなし前肢は垂  
 直にして善く發育したる筋肉を有し後肢も長く垂直にして前  
 肢に鈞合へり踵は地に近接してあり跗は兎の如く趾は穹状を  
 なし體毛は短けれども密生し太くして稍硬く毛色は純白にし  
 て光澤を有し尾は長十寸乃至十二寸あり先端に近づくに従ひ



ヤローテラップ

て細り上方に彎曲せり歩行する時には高く之を揚ぐ

十「ブラック・アンド・タン・テリヤ」 (Black-and-Tan Terrier)

犬に關する古歴史を繹ぬるに英蘭には頭部厚くして圓く、頸短く、體の緊充せる粗毛の黒と黃褐の駁色なる「テリヤ」ありしが其黃褐色部は今日のものより大にして淡色なり而して其性質勇敢に野獸を追驅して坑中に入るの特質を有したりしヨット氏の説に據れば短毛種の「テリヤ」は之と「ハウンド」の雜種によりて生じ粗毛種も亦之と「カア」(Cairn)との間に生じ其他の「テリヤ」種も皆之と他種との雜種により生ぜるものとせり然るに前に擧ぐる古昔にありし粗毛の黒と黃褐の斑色なる「テリヤ」は過去數世紀間に大に改良せられ筋骨緊固、風丰剽輕、體毛短

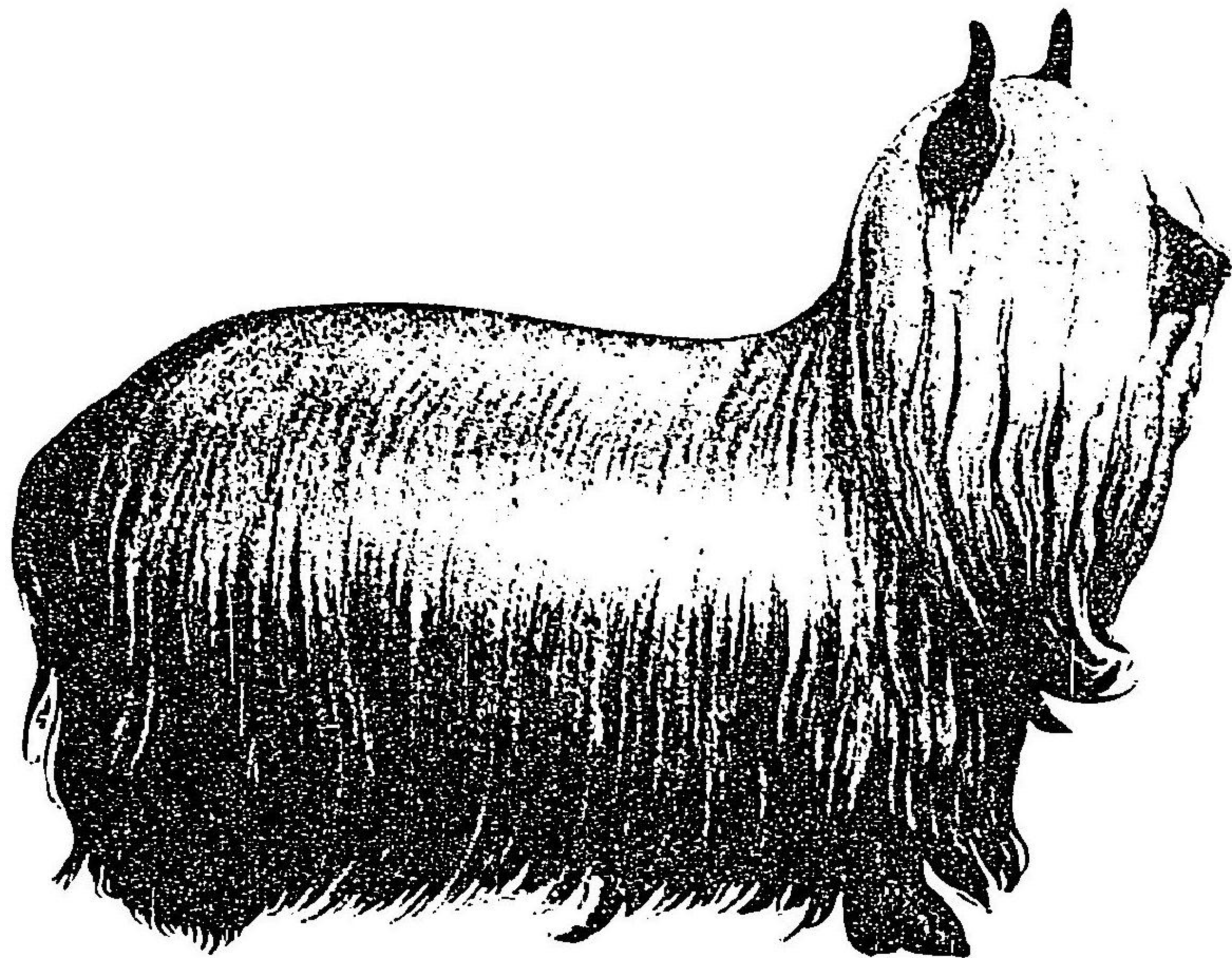
くして美麗に滑なる漆黒色にして僅の部分に黄褐色毛を有するものと變化せり體貌の改變せられたると共に其性質にも變化を及ぼし争鬪を好むの習性と勇敢の氣風とは大に消退したれども其家鼠を捕ふるに巧に且敏捷なるは他種の及ぶ所にあらず外觀の優美に性質の順良なるは愛玩に宜しく番犬として亦能く不時の侵入者を防禦す鬪争を好むといふにもあらざるも一たび怒れば祖先遺傳の特性を現はし勇敢猛進死に至るも屈せずして鬪ふ其形小にして體重七斤乃至二十二斤頭は幅狭くして殆んど平に、雙眼の間稍凹窪せり顴部には外方より見らるべき筋肉現はれず顔面楔形にして鼻部に向つて細り眼は長橢圓小にして鋭く黒色なり、雙眼の間餘り隔らず鼻は黒く耳は小にして薄く頭頂に雙耳近接せり此種には多く截耳を行ひた

るものなれども今日にては慘酷なりとして漸く之を廢するに至れり頸は餘り長からず肩の方に太くして稍彎曲せり胸は幅狭くして深く肢間の距離も亦狭し肢は垂直にして趾は相開きて穹狀をなし中央の二本は他のものより長し後肢の趾跖は猫の夫れの如くなり體短くして腰部稍穹狀をなし尾は根部太く先端尖り歩行する時にも腰より高く之を揚ぐることなし被毛は短く硬くして密生し毛色は黒色と黄褐色の斑にして其色濃厚に又眼の上部に各一個の黄褐色の小圓點を見る顴部にも僅の黄褐紋あり上下唇下顎及胸に亘りてV字形をなせる黄褐紋あり前肢は黒く腹部の地に面せる部及後肢の踵以下の後側又肛門の周圍より尾の下側は黄褐色にして其他の部分は皆光澤ある漆黒色なり

此種は毛色の配合宜しきものを得ること困難にして其最賞揚せらるゝものは黒色部と黄褐色部の境界鮮明なるものなり而して黄褐色部の大なるものも之を嫌ひ又小なるものも好ましからず若し胸部に白色紋の現はるゝものは最劣等のものとなせり然るに充分に親犬を撰擇したりとて六七頭の仔犬中には必ず一頭位は白紋を有するものあり其白紋は生後二週間位にして消失するものも之あれども通常は終生消失せざるなり

### 十一「ヨークシャー・テリヤ」(Yorkshire Terrier)

英國ヨークシャー(Yorkshire)州の原産に係り矮小にして長毛美麗なる種なり十數年前までは同地に隣れるハリファクス(Halifax)にても人の知らざりし程のものなりき一見スカイテリヤ(Scot kye terrier)に似たれども其異なる點は彼に比して其背部の短き



ヨークシャー・テリヤ



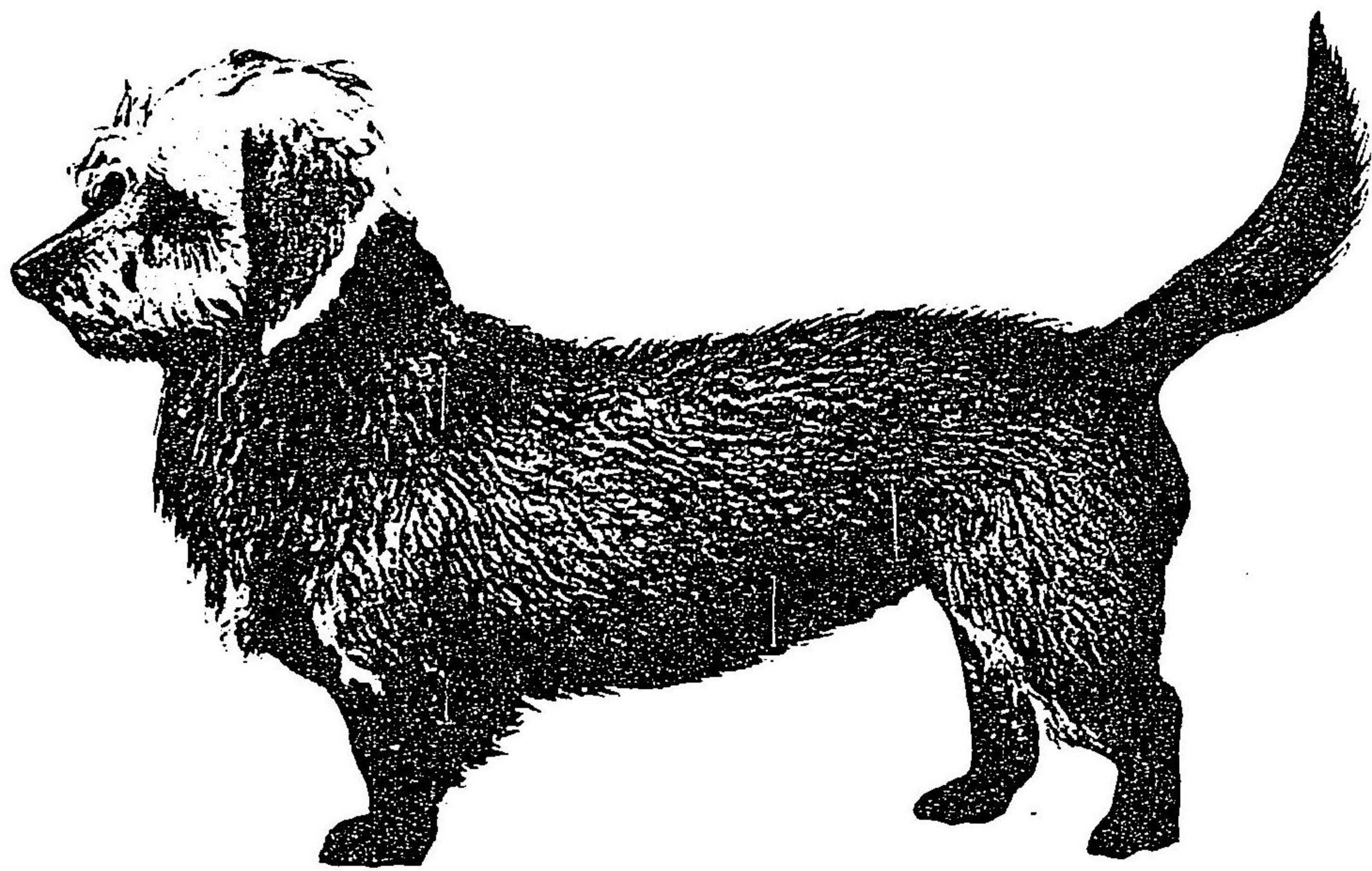
にありて其點よりすれば却て「マルテキステリーヤ」(Maltese terrier)に似たり然れども毛色は異なれりとす此種の仔犬は其分娩の時には毛色黒及黃褐色なるも其後數月にして漸々變化し性來の毛色を現はし來ることは「ダンデー・ディンモン」(Dandie Dinmont)に似たり

他の「テリーヤ」の如く性敏捷にして熱心に小動物を捕殺し又勇敢にして其小形の體軀を以てして巨大なる犬に抵抗し又之を咬撃することをなすされど毛色美麗に體形亦小なるを以て愛玩犬として飼養せらる、全身長毛を以て被はれ數時の長き毛は鼻端より尾の先端まで一帯に兩方に分る頭部は小にして扁たく、鼻は他部の割合に廣くして黒色に、眼は小にして同しく黒色なり、耳朵は薄くV字形をなして半立せりされど此種は普通截

耳をなす體毛は長くして織軟絹絲の如く口の周邊に生ぜる鬚毛は數時に達す全身黒色にして鼻端より肢に亘りて濃黃褐色を見る體量軽くして小なるものは五六斤大なるものも十八斤を越ゆるもの鮮なし

十二「ダンディーモンスト」(Dandie Dinmont)

此種は其外觀餘り美ならざるを以て數年前までは歐洲大陸に於て之を愛養するものなかりしが舉動活潑にして兒童婦女の好同伴たる可憐の性質は大に人の愛好を惹きて之を飼養するもの漸く増加するに至れり此種の起原に關しては種々の説あるもロックスバリーシヤアのホンデレー村に住したりしゼームス・ダビッドソン氏により飼養せられたりしものより出で其初め「スコティッシュ・テラーヤ」(Scottish terrier) と「オッター・ハウンド」(Otter hound) と



トモンイデーイデンダ

の雜種に成れりと云ひ傳ふ

性質鬪争を好むといふにもあらざれども一たび忿怒するとき  
は猛烈當るべからざるの勢をなし同朋といへども互に相咬嚙  
して斃死を見ること屢之あり故に此種の牡犬二頭を同舎に飼  
養することは頗る危険なり斯く勇敢なるを以て獵に當り狐狸  
を追驅して其窟に迫り目的の獸畜は既に逸したるに拘はらず  
異なる孔口より進入したりし二頭の犬は長時間出で來らざ  
るを以て穴窟を發いて之を検したりしに二頭の犬は相咬嚙し  
て共に斃れ居たりと云ふ

頭部は重大なるも體の權衡を失する程にはあらずして雙耳の  
間廣く眼の方に近づくに從ひて漸く狹窄し眼の内角より頭蓋  
の頂點までの長は兩耳の間の長に等し、頭部には甚軟き細毛を

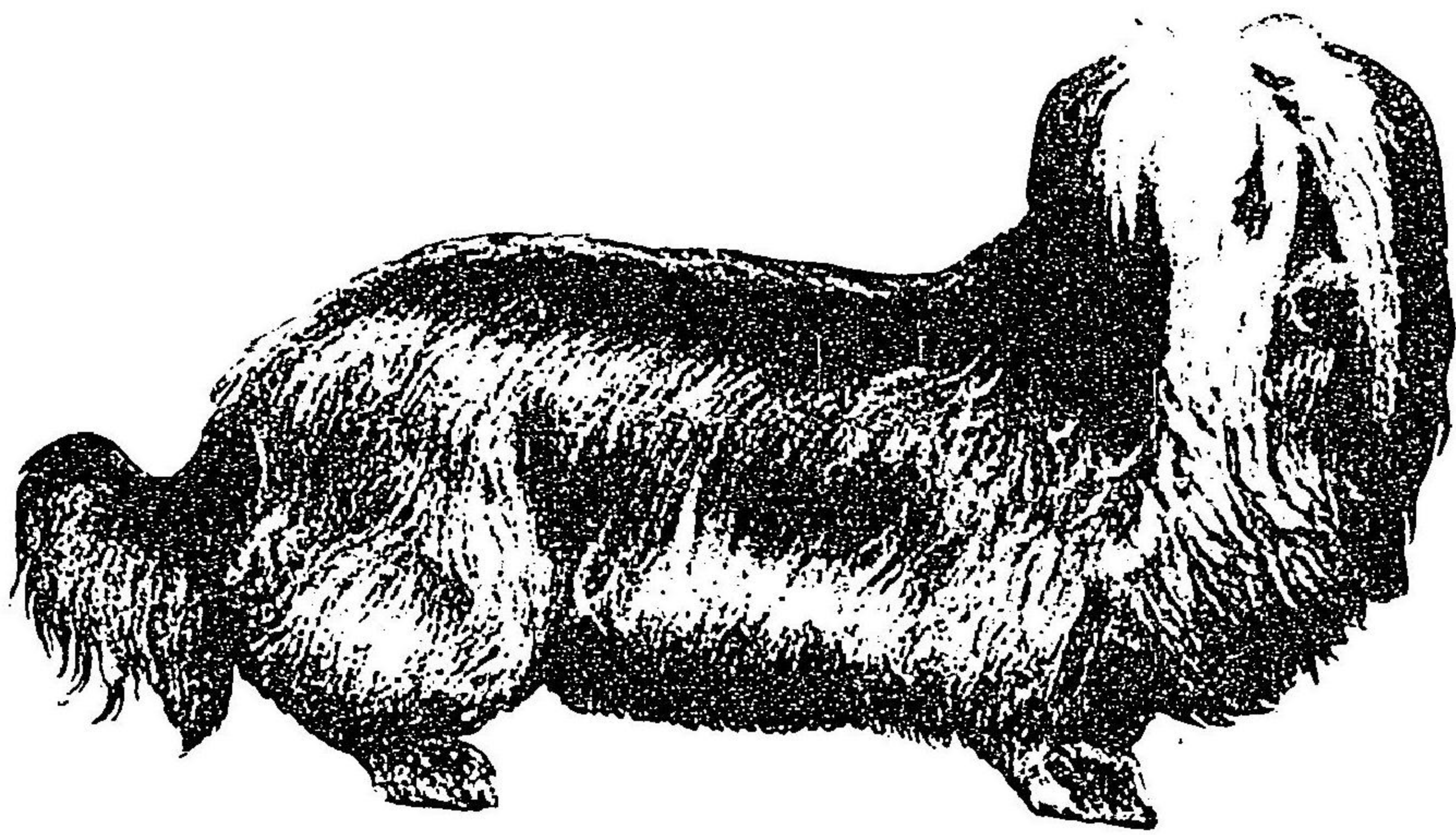
密生す、顎は厚くして耳邊より鼻先に至るに従ひて細れり、鼻梁は頭部よりは稍濃色の毛にて被はる而して鼻端より眼邊に至る幅一吋程の間は被毛非常に薄く、鼻端及口唇は黒色なり、眼は黒色圓大爛々として果敢にして知能あるを示し、雙眼の間隔は廣く、耳朶は大に長三四吋にして薄くV字形をなし、顴部に密接して垂下し軟き褐色毛にて被はる間には黒毛のものあり、耳朶の先端には長二吋位の長毛を見る、胸は善く發育して圓く、背は長く穹状をなして屈伸自在なり、尾は短くして長八吋乃至十吋、其根部は體毛より濃色なる二吋程の長毛にて被はれ先端に近づくに從ひて被毛短し、尾の先端は稍彎曲し歩行する時には高く之を揚ぐ、前肢は短く骨太にして肢間の距離廣く、後肢は前肢より稍長くして肢間の距離亦廣く、體毛は二吋許の長を有し頭

頂より尾端まで硬軟二種の毛を混生し腹部は淡色にして稍軟なり、毛色は赤褐色のものと淡暗褐色にして肢の黄褐色なるものとの二種あり、體重は十八斤より二十四斤あり、地面より肩までの高八吋乃至十一吋、尾根より肩までの長は地面より肩までの高の二倍より二吋程短し

### 十三「スカイ、テールヤ」(Skye terrier)

蘇格蘭には粗毛なる諸種の「テールヤ」種存在せり而して地方により一種の形態を有し地方の異なるに従ふて形態稍異なれり而して是等種々なる形態を有するものも其源は「スカイ、テールヤ」と「ダンディー、デインモント」の二種より出づ其他硬毛を有する「ダッチ、テールヤ」「エアデール」等も亦之あれども晩年に至りて世に紹介せられしものなり此「スカイ、テールヤ」は蘇格蘭の「スカイ島

及之と相對する海岸地の原産なるに拘はらず今日にては其種固有の形態を有するものは却てハイランド (Highland) 地方に多し此種に耳の直立せるものと垂下せるものとありて垂耳のものは體軀稍長く被毛も亦長くして軟に立耳のものは之に反せり然れども兩者ともに其形態相似て四肢短く體軀長く長毛を以て被はるゝ小犬にして知能發達して注意深く且體質強壯にして何の地にても飼養し得べし此種は鳥獵に使用し得べく又體軀の矮なるを以て穴窟にある狐狸を驅るに適し即ち温良にして性質の靜穩なるを以て愛玩に宜しく能く生命を奉じ室内に飼養するも體臭なく秋候の脱毛期にも其毛紛亂して唯纏縮するのみなれば之を梳去すれば又脱毛を室内に散亂するなどのことなし又蘇格蘭英蘭にては獵場の監守人又は労働者等が



ヤリーフェイス

室内に愛養して番犬の用に供すと云ふ  
形態は頭部長く扁平にして前頭と鼻梁との間階段を存せず只  
斜面をなして連れり、雙耳の距離と兩眼の間の廣さは相等しく  
して大差なく、顎は先端尖り、鼻は其色黒く、耳は頭部に高く聳え  
耳朶大ならずして三時に達せず垂耳のものは顴部に密接して  
垂下し、立耳のものは垂直に聳てり、眼は黒く眼光鋭くして知能  
に富めるの相を現はし、胸部は圓く圓筒状をなし、頸は長く、肢は  
垂直に、趾跗は圓くして長毛を有し、後肢に距爪を有することな  
し若し之を有せば純粹種にあらず、胴は長圓に、尾は垂耳のもの  
にありては歩行の際に低く垂下し立耳のものは背の水平線と  
等しき高に之を揚ぐ、體毛は上毛と下毛の二種を混生し下毛は  
密生して軟く殆んど羊毛の如く上毛は長くして粗硬に背の中

央より兩側に分れて垂下し地に達せんとするものあり、頭部の被毛も長くして眼を蔭蔽し、尾部にも長毛を見る、毛色は光澤を有する灰色、黒色又は淡赤褐色等の單色なるか又は黒白斑なり、地面より肩までの高九吋乃至十吋、鼻端より尾の先端までの長は垂直のものは三十五吋乃至四十吋、立耳のものは稍短し、體重十六斤乃至二十斤あり

#### 十四「アルコー」(Alco)

此種は頸部短く體軀圓筒形をなせりフンボルト(Humboldt)氏は護羊犬と同種に屬すべきものにして體色黃白の斑なりと云ひブフォン(Buffon)氏は其毛色白と黒の斑にして眼上に黃褐色の點斑を有すと云ふも今存するものは殆んど皆白色にして耳の周圍に黒斑あるのみなり其形態は「ニューファウンドランド、ドッグ」

(Newfoundland dog) に似たる所あり、小形にして頭部比較的大に、顛頂骨突起し、鼻梁は先端尖らずして圓弧状をなし、耳は垂耳にして、體毛は長く軟く、尾部の被毛も亦長くして總状をなせり、此種は今日にては飼養するもの少なく唯、稀に婦人の愛玩として飼養せるを見るのみ

#### 十五「メキシカンヘアレス、ドッグ」

(Mexican Hairless dog)

此種は「ヘアレス」と云ひ「メキシカン」の稱を冠せるを以て無毛種にして墨西哥の特産なるが如く思ふものあれども否らずして熱帯地方及亞熱帯地方に飼養せらるゝものにありては其被毛薄く或は全く無毛のものを見るなりベローシヨウ(Vero Shaw)氏は其「ブック、オブ、ドッグ」(Book of the Dog)に「ランプアー」(Rumpur)種の條

下に説て曰く「ランプードグ」(Rampur dog)はプリンス、ラプ、ウエー  
 ルス(Prince of Wales)氏が印度遊歴の時初て持歸りしものにして稍  
 小形の「デ非ヤハウンド」(Deerhound)に似て其特徴は全身被毛な  
 く皮膚滑かなり然れども暫く英國に飼養するときは僅の短毛  
 を疎生するに至ると又同氏は無毛種の部に「チャイナ、クレステ  
 ムドッグ」(Chinese Crested dog)を挙げ説明して曰く此犬は頭頂より  
 頸及肩に至るまでには毛を有し顔面及尾の先端には僅の毛を  
 疎生し其他は裸々無毛にして間には皮膚に斑紋を有するもの  
 ありと又曰く同く支那より持來られし一種にして前者より小  
 形に體重八斤乃至十斤、全膚裸出して頭部は「トイテリヤ」の  
 如くして、耳朶薄く大に三角形をなして直立し、其尾は細くして  
 長く、體色即ち皮膚は黒色なり、上述するもの、他に無毛種に

屬するものありと云ふも其形態孰れも相類し亞弗利加、伯刺西  
 爾、土耳其、印度、支那、墨西哥等に在るもの皆同一種なりとす然る  
 に無毛種と云へば得て墨西哥種を擧ぐるは同國にては大に此  
 種の犬を愛養するを以てなり即ち僕麻質斯患者が其局部を此  
 種の犬體に押當て、暖を取り以て温布の代用となすことを爲  
 し又土人は之を屠り食ひて飢を凌ぐを以て有名なり  
 無毛種は室内の愛養に至適し其横臥したる跡にも被毛の脱落  
 散亂なく又悪臭を止めす加之蚤、壁、蝨等の寄生なければ清潔の  
 點に關しては最たるものなり

一般の形貌は「グレイハウンド」と「テリヤ」とに相似たり、體の前  
 半は「テリヤ」に類し、後半は「グレイハウンド」に似たり、尾は短く  
 して細く、背は短く、頸は圓く、頭は短くして幅稍廣く、眼は褐色に、



鼻梁は先端尖り、耳は直立せり、皮膚は軟くして仔羊の皮膚の如く其色暗灰色なり

此の如き無毛種の生出したりしは動物の氣候風土に馴化せし結果にして即ち該種の生育地にては氣候温暖に空氣乾燥なるが故に被毛によりて寒濕を保護するの要なきを以て遂に無毛となりしなり又「ポインター」「セッター」の如きものを印度等の熱帶地に移して永き星霜を重ねるときは其體毛漸く薄くなり遂に消失するに至り之に代りて皮膚は其厚さを増すを見む、熱帶地に無毛種の存するの理も亦之に異ならざるなり

い

ぬ

終

農學士足立美堅君小傳



陸軍歩兵少尉正位八勳等五功級  
農學士足立美堅君

## 歩兵少尉農學士 足立美堅君小傳

君、諱は美堅、水石と號す、足立氏、父、正聲君、字は興卿、天瀑と號す、舊鳥取藩池田侯の世臣にして、所謂藩の勤王二十士の一  
人なり、明治維新の際、藩論の能く一定して、大業を氣養せし、偉勳に對し、與かりて力あり、今、宮内省に仕へて、主簿官、兼諸  
陸頭に任ぜられ、又、荏藩主家の顧問として、其家政に宰たり、  
美堅君は、正聲君の長子なり、明治七年、十一月十二日、東京麹町區、三番町、八十一番地の宅に生る、母は大谷氏、君既に長じて、  
穎悟温順にして、能く庭訓に服せり、二十二年、區内富士見小學校全科を卒業す、此間、東京府廳、麹町區長より、學術品行優等の  
賞状を受けたり、二十二年、高等師範學校附屬尋常中學校に入り、二十五年九月、進みて仙臺なる第二高等中學校に移り、三十二年  
七月業を卒へて、同年九月、東京帝國大學農科大學農學科に入り、三十五年七月卒業せり、君賦稟強健ならず、病を以て數年休學せ  
しことありしかども、孜々として、勉めて息まず、終に、農學士の稱を得るに至れり、此年、三重縣に聘せられて、講師となり、農  
事の改善に盡力したり、  
三十五年、十二月、君、一年志願兵となりて、近衛歩兵第一聯隊第八中隊に入り、明年十一月三十日、除隊となりて、翌日、陸軍歩  
兵軍曹に任ぜられぬ、  
三十七年二月、露國に對して、開戦となり、六月十八日、君、召集に應じて、歩兵第三聯隊補充大隊第五中隊に入り、同日、豫備見  
習士官となり出征を命ぜられて、九月二日、途に上れり、發するに臨みて、父正聲君、送別の辭を述べて、曰く、  
明治三十七年二月、天皇、露國に對して、宣戦の 大詔を下さる、專に八月、汝美堅、將に子役せむとす、老父、乃ち、祝盃を  
舉げて、骸核に代ふるに、一言を以てせむ、汝、幼にして廷弱、然るに、克く屢勉業を修めて、學士となり、尋て、一年志願兵に  
加はりて、毫も懈怠なく、能く奉公服務、其役を了り、家に歸りて、將に業に就き、身を立てむとするや、未だ數月ならずして、  
此國家の大事に際す、是れ汝が不幸を見る如しと雖も、亦實に、皇國未曾有なる響悠の大盛舉にして、國民の生れて此時に際  
會するもの、誰れか敵愾報効の念を起さざらむ、況や、汝が如き、身軍隊に伍し、士官の末に班し子役するもの、何の榮譽か、之  
に如かわや、余今年、已に六十有四、老後、汝に依頼せむとするものなるも、汝が今日萬里遠征の途に上るを見るは、實に拊舞に

勝へざるなり、往矣、赫々たる 皇上の威靈は、汝が頭上を照し、老父勤王の心魂は、汝が身邊を纏はむ、是れ即ち、汝が冒たり、甲たり、而して、汝が腰間の佩刀は我が舊藩主家に傳へられしものたり、汝之を揮ひ、益精神を奮勵し、戦闘に従事し、一身を顧みず、日本男兒の忠勇を發揚し、敵兵をして、寒膽離服せしめよ、若し、微功を奏し、日章旗の光輝を添ふることを得ば、家門の眉目、何を以て之に尙へむ、但、汝、常に衛生に注意し、二盞の饜ふ所となること勿れ、幸に戦勝凱旋、再び相見の日あらば、一家堂上に團欒して、共に大白を稱げ、萬歳を連呼せむのみ、往矣、美堅、勉めよや、美堅、且、和歌を餞して云ふ、

君の爲め身は盡さむとちかひてし親の心をこころとよせよ  
美堅君、容を改めて、之に和せり、曰く、

君の爲め身は盡さむとちかひてし親の心をこころとよせよ

君の爲め身は盡さむとちかひてし親の心をこころとよせよ  
君、遼東半島旅順方面に若するに及びて、第三軍後備歩兵第十五聯隊第四中隊に屬して、直ちに第一編隊成任務に就けり、九月十四日陸軍歩兵少尉に任ぜられ、十一月一日、正八位に叙せられぬ、  
九月十九日、我が軍、旅順背面二〇三高地の西北方高地(太平洋東南)を攻撃す、其前、一二日、攻撃の準備として、夜、大砲を一高地に引上げべき特別な命令、第四中隊に下れり、君、乃ち、片岡特務曹長と共に、部隊を指揮し、大雨を利用して、其任務を遂げた、十九日の攻撃には、第四中隊は、軍の豫備隊となりて、新砲臺(標高一七四)に留まりしが戦闘激烈となりしに因て、二十一日、午後八時頃より、第一突撃隊の増援として、進みて彼の山上に向へり、最後の二十二日は戦最も烈し、君、時に、尙、見習士官にて、第四中隊第二小隊長なりしが、身を挺し、部下を勵まして、奮闘最も勉めたり、此戦に第四中隊は、中隊長代理伊原少尉、第一小隊長片岡特務曹長、相繼て戦死し、第三小隊長某も亦傷き、全中隊は、中隊長以下百六十四名なりしに、戦後には八十三名となりきと云ふ、其激戦なりしこと想ふべし、君も亦、砲彈の破片の爲に、右膝頭に擦過傷を受けたり、衆皆退て加療せむことを勧めしかども中隊幹部には、君一人残りしのみなれば、聽かず、獨り留りて、中隊の殘兵を指揮し、戦の終結まで、能く其職を盡したり、  
此戦に、君が勇奮の状、亦平生の溫和の相に似ず、適、第三中隊に、親友歩兵少尉堀丹二のあるを見て、呼で、「堀、しつかりやらうな」と勵したりと云ふ、

君が九月二十八日付を以て、家に寄せたる書に曰く、當旅團は、十九日午後二時より、或敵艦に向て、攻撃を開始仕候處此の砲臺は敵に取ても主要なる堡壘に候へば、防戦尤も務め、二十一日に至るも、尙陥らず、我聯隊の我大隊も、遂に、二十一日より、最前線に増加して、攻撃仕候が、中々の激戦にて、彼我砲臺を投じ、又は石を擲合ふ迄近寄り、砲彈は周圍に落下し、彼我の死屍は山をなす、其屍を踏越え突貫せるが、爆藥に飛ばされて、首無き屍體、又は頭蓋の割られたる死體、周圍にあり、此等を物ともせず、進みては死し、或は傷きて倒るゝ我將士の勇敢なること、實に頼母しく御座候、我中隊の如きは、中隊長戦死し、片岡特務曹長(第一小隊長)も戦死し、第三小隊長負傷し、私も微傷を砲彈の爲めに被り候が、僅の傷の事とて、殊に中隊を指揮するもの無之候間、戦線に止まり、中隊を指揮して、二十三日午前一時、戦闘終り、只今は、或山上に敵と對峙致居候、十九日より二十三日に至る四日間、重焼パンを食ひ、少量の濁水に渴を醫し居候が、二十三日より、占領致し居る山にては、敵に近き故、火を燃す事もならず、挽粥飯に濁水を注ぎて流し込み、干麩の焼かぬものをかじり居候、居る所は穴の内にて、丸で熊の様に候、云々、  
戦闘は、今度が始めに候が、實に豫想に反して、悲惨のもの、否、寧ろ極端と申程にて、何に例へん様もなく、其當時は何とも覺えざりしも、今日となりては、實に身の毛の慄つ様に候、我中隊は戦闘の初めには、中隊長以下百六十四名の處、戦闘後には、私以下八十三名と相成候、云々  
十月十八日付を以て、友人農勇士石崎芳吉に寄せたる書に曰く、小生の微傷を蒙りし事につき、種々御配慮の趣、難有存候、實は此れしきの傷を申上ねばよかりしに、今更考へ居候、併し、後に官報にでも出た時には、却て悪からんと存じ、自宅と大兄のみに御通知申上候次第なり、小生の傷は、右膝關節部砲彈破片擦過傷にて、九月二十二日午後四時半頃、或砲臺を攻撃し、敵艦に肉迫して、爆藥を投じ、或は互に石投げを致居候處、敵の砲彈七冊知位のもの、小生の左前三尺位の處に落下し、爆發致候が、密集せる處に落下せし故、命中せし部分の兵は、支離滅裂、影も留めず候爲め、石礫の飛散も少なく、破片も高く上りしたため、小生はうましく逃れ候が、續きて來りし一彈は、一問程前に落ち、又候、五六名の兵は跳飛され、小生は血を浴び、左の腕には、肉片、骨のさけたるも附着致候、其時、一破片は、上より落來り、右膝を擦過致候が、微傷故纏帶して、引續き、戦闘に従事し、二十三日戦闘終り候が、小生の中隊幹部にては、小生一人残りしのみなれば、一日纏帶所にて休養せしのみにて、再び戦線に歸り、十日程にて、全癒致し、引續き中隊長代理を務め居候、云々、

君が少尉に任官の命は、十月十日、君が許に達せり、任官後は、専ら中隊長代理として、夜間の警戒に従事し、時々逆襲の敵と戦へり、君が従軍中、獨立の戦功を立てしは、實に十月十一日夜の強行偵察なりとす、此の目的は二〇三高地の攻撃に有力なる前進陣地を得むとし、戦線の前方五百米突許にある一高地を占領するにあり、然れども、此の附近一帯は、敵の勢力範囲内にあるを以て、其防備の如何なる、其兵數の幾許なるを知るに由なく、極めて難事なり、當時の第一大隊長代理岡部大尉は、配下より撰抜して、此重任を君の中隊に託せり、君、即ち第一第三の二箇小隊を率ひ、獨立指揮を執り、一隊俱に決死を誓ひ、午後八時に進み行きたしが、幸に前面にありし敵は、約一小隊にして、難なく撃退して、山を占領せり、初め第一大隊長は、全隊戦線に立ちて、偵察隊の安否を待ち、大隊長は、時々斥候を出して情況を探れども、四邊暗黒にして、咫尺の味方さへ判別し難きを以て、皆中途より引返し來りて、絶つて消息を知ること能はず、或は、方向を誤り道路に迷ひしにあらざや、或は敵の有力なる斥候と出會ひしにあらざや、又敵に圍まれしにあらざやなど、種々に危ぶみ居たりしに、午後十一時に至り、全く目的の地點を占領して、標識を立てたりとの報あり、大隊長踊躍して喜び、君が重任を遂げし功勞を激賞せり、君が勇敢なる此偵察遂行は、二〇三高地の中腹に至る有利なる前進陣地を作るを得て、同地第四回の總攻撃に當り、我軍の大なる利益を得たる基因となりと云ふ。

十月十五日、家に寄せたる書に曰く、去る九日より、危険なる警戒に任じ居、十一日には、或目的の爲に、某山を占領せんとして中隊は獨立して運動を起し、私は中隊を率ひて前進致候が、幸に前面に在りし敵は、約一小隊にて、難なく之を撃退して、山の占領目的を達し申候、翌日より、他所の警戒に任じ居候か、又廿一日より、當中隊は、危険なる警戒に任ずる事と存候、云々。

十月十七日午後十一時付を以て、石崎農學士に寄せたる書に曰く、小生其後引續き警戒に任じ居、日々小戦闘を致居候が、無事に候、兵卒は、一日に一兩名宛死傷を生じ居候、夜になれば、敵は泥坊的に足音を立てず、窺かに我陣地に近づき、近寄り、爆藥を投するに閉口仕候、若し此の爆藥にかゝるときは、骨肉紛散する程にて、然らざるも附近に在りて此の瓦斯を呼吸する時は、窒息して死する者に候、此れは、我軍にても使用候へども、敵の方が多く用ふるに候、又茲に尤も面白きは露助は斥候の爲め犬を使用致す事を見致候、此の犬は指示される方向に向け行進し來り、我兵を見つるときは、直に急ぎ引返し、我兵の所在を報する様に存せられ候、昨夜より、敵が此の犬を使用致す事を知り、今夜は其積にて注意致居候處、果して犬が近寄りし爲め射殺致候、此の犬は、何種なるか明かならず、大形にして耳の垂れ居る様は、古昔軍犬として使用せる Blue hand にはあらざるか、研究

物に候

當方面も、廿日過ぎには、一大戦闘有之べくと存候、併し中々陥落迄は、前途程遠し、事に因ると攻圍の儘冬籠りかとも存せられ候云々、

十月廿五日付を以て、家に寄せたる書に曰く、當地、數日來寒冷相加はり、夜間三時頃より、一層身に浸み申候、今朝は、厚き二分位の結氷を見申候云々、

今日は、後れ馳せながら、十三夜の月見團子の積りか、砂糖醬油を付けたる大團子二個宛、炊事より分配に相成候が、攻圍軍中に、栗や柿枝豆はなくとも、月見の宴とは一つの紀念かと存候、

奉天方面は、十二日來、大勝にて、敵は一萬餘の死屍を残して敗走との報に接し候は、愉快に存候、云々、

九月十一日以來、入浴もせず、日々顔と手先を洗ふが關の山にて、足先きは二回洗ひ申候、體は露脂の如きものにて覆はれ、皸腐と相成、一寸掻けば、白き粉が落ちる様に候、併し牛風子は未だ宿り不申候、云々、

十月末より、第四中隊は、豫備増援隊となりて、高家屯の村落に露營せしが、君は、十一月廿五日まで、旅團の將校巡察として、數回夜間の巡察をなし、又、屢或る特別の任務を受けて遂行せり、

少尉畑丹二の談に曰く、足立君は、此戦後、復た豫備隊となりて、右翼方面の援護に任ぜり、此方面は、毎夜敵の逆襲猛烈にして少時の休息すら、取ること能はず、兩夜の如きは、樹陰又は民家の簷下に佇立して、纔かに雨露を避く、敵來襲の度毎に、それ右、それ左と、刻々命令に接して、奔馳し、戦線にあるよりも、人知れず一層の辛苦を嘗めざるべからず、一日君に面せし時、「豫備隊となつて、却て骨が折れるよ」と言はれたることありき、

十一月六日付を以て、家に寄せたる書に曰く、當地に同時に來りし見習士官仲間にて、學士連中、河原氏の戦死を始め、生死不明一名、重傷一名、輕傷一名、今満足にして當地に在るは、私一名に御座候が誠に心細き次第に候、云々、

十一月十四日付を以て、八嶽農科大學助教に寄せたる書に曰く、五城出身之同窓諸兄を代表して、懇情溢るゝ計の御慰問狀を辱うし、雖有拜誦仕候（此間廿二日の戦況を記す、重複なれば省けり）當地の陥落に就ては、内地人の鶴首して期待せらるゝ所にして攻圍軍の崩甲斐なきを嘆せらるゝならんも、當地に在るものとて、一日も早く陥落萬歳の聲を揚げんと奮勵致居候も、兎も角も、

「ロスキー」が難攻不落と誇りて、あらゆる文明の武器を集めて防禦致居、現に敵の堡壘には、魚形水雷をも備へ居候位なれば、只大和魂のみにては勝を制し難く、大和魂のみを以てせば、今日迄發表せられし以上の死傷を生ずる事と存候次第、昨今の新聞紙上に公表せられし如く、ぢりぢりと押寄せ行く有様に候殊に漸々攻撃に困難と相成るは、要害戦の通則故、以後の戦闘は、益々激烈ならんと存候、上述の有様故陥落迄は尙少しく手間取る可く存候、

小生、先頃迄は、山頂に在りて警戒に任じ居り、山腹に濠を掘り、板と藁にて屋根を葺きて、乞食小屋然たるものを造り、其内に起居致居、去月末に至り、山を下り平地に出で、或村落に入り、「チャン」の家に入り居候が、敵壘下の所にあること故、晝間一人にても姿を現せば、老鐵邊りより、十五珊知弾がぐんぐんと音して来り候爲め、晝間は小さくなりて家に潜み、夜に入ればこそと遣出し或任務に服し候、云々、

十一月十八日付を以て、家に寄せたる書に曰く、當中隊は、去月廿八日、旅團豫備隊として山を下り、旅團司令部近くに居りし處新聞にある如く、三十日、最右翼の敵襲に際して、増援の爲め馳付け、其敵を撃退して、今に最右翼鳩灣（直徑九町許）に近き村落に潜み居候、

第鼠の「ステ公」本隊に入られて益々狂ひ廻り居り、手も付けられず、夫れかと云ふて、攻圍の儘、彈藥糧食の缺乏を待てば、「バルチック」艦隊来る恐れあり、故に、何れにしても、本年中には陥落せしめねばならず、其の爲め、新銳の某師團も来る噂故、一押に採立てるも近きにあらんと存候、我聯隊の如きは、只今對峙中の一砲壘も落せば、任は終らんかと存候、然し其砲壘が随分有名なもの（右翼にある高山）につき骨は折れる事と存候、云々、

十一月廿三日付を以て、家なる妹氏に寄せたる書に曰く、當地は、昨廿二日未明、少時間降雪有之、隨て寒氣も稍強き様に覺え候云々、去る廿一日夜には、休宿地たる余の家屋を、露介の野郎、遠慮もなく砲撃致し、其發射彈は、悉く余の家屋にのみ落下して、實に危険なりし爲め、夜逃げして、他の家屋に移り候、云々、

今日は、新嘗祭故、志留粉でも致さんと存候、云々、父上様には、本夜は遅く迄御祭典にて、御苦勞に存候、十一月廿四日認め、同廿五日發を以て、家に寄せたる書あり、是を絶筆とす、曰く、十一月十四日付の、御手紙拜見仕候處、皆々様御安全之趣、欣賞之至に存候、當地、其後は割合暖き様に覺え候、私事無事に健康に罷在候、御安神被下候、當方面の戦闘もぢり

ぢり押にて、今に陥落の運びに至らぬは、残念に存候、「バルチック艦隊」も近き内には来る様に候へば、夫れ迄には如何にしても、陥落せしめねばならざる事と存候へども、尙敵の砲壘は、總てを敷ふれば四五十もあるべく存候へば、此等を全部奪取するには、随分骨の折れる事と存候、なかなか香氣には出来ず候、何れ大風か、大雨か、又は大雷が起らんと存候、我隊も活動するならんと存候、それ以上は申上乗候、云々、

今日も敵より我隊の宿營せる村落を砲撃して、彈丸家屋に落下し、「チャン」が二名斃され候、我兵は無事に候、これにては閉口故、又々穴に入らんと、只今工事中に候、

片岡君の最後は、先般同君の内氏に宛て申進候が、同君は小生と同時に着隊後、小東溝東南方高地に於て、小哨長として、前哨勤務に服し、十九日より太平溝東南方高地（敵の最も堅く防守せる一砲壘）攻撃の時には、師團豫備隊として、小東溝東南方高地に在り、二十一日未明、突撃部隊増援の爲め、太平溝東方高地に至り、同夜より、前進部隊に彈藥糧食の運搬分配を掌り、二十二日午前三時頃より、前進部隊に増加し、同日午前六時半、突撃せんとする時、同君は第一小隊の先頭に在りて飛出し、直に敵の猛射により、右前頭部より後頭部に貫通銃創を受け、眞に名譽の戦死を遂げられ候は、氣の毒に候、云々、

當地の戦闘は、益々甚ならんと存候、當隊も今の様子にては、第一線にありて、大に役立つ事と存候、云々、

十一月二十五日、戦闘開始の令あり、此時、第四中隊は、後備歩兵第一聯隊の豫備隊のまゝにて、陣笠山に進む、二十六日尙同山にありて終日終夜戦ふ、二十七日午後一時、第四中隊は豫備隊となりて大平溝に集合すべしとの命あり、即時に發して、四時其地に着し八時二〇三高地に向て進み、同高地の北麓に停れり、

二十八日、第四中隊は、午前六時より、第一突撃隊の増援となり、君は、中隊を率ゐて奮進し、彈雨硝煙を事どもせず、勇氣凜然として、劍を揮ひ、部下を叱咤奮勵し、同高地の第一壘深を踰え、鐵條網を破り、堡壘前二十米突許に接せる時、敵彈雨注し、遂に、右頭部、右頸部、右肩胛部（肩胛砲丸子創）に重傷を負ひしかども、風せず、勵聲して曰く、退く勿れと、但如何にせむ、負ひたるは致命の傷なり乃ち壘上を睥睨しつゝ、擔架に送られて山麓の假纜帶所に至れり此時精神未だ衰へざりしが午後第一師團第三野戦病院に入りて終に死せり、然れども、後數日、終に、〇三高地を略取せしは、君が十月十一日の獨立の戦功に起因し、越えて一月、旅順亦陥りしも二〇三高地の略取に起因せしを思へば、君が努力、効を成せりと謂ふべし、君亦以て嘆せんか、

十二月十四日、第四中隊長代理竹内寛吾が、父正聲君に寄せたる書に曰く、  
肅啓

御令息陸軍歩兵少尉足立美堅殿 當隊に補せらるるや、嚴格なる風姿と燃ゆるが如き熱情とを以て、小隊長の任に當たらせらる、部下の士卒、少尉殿の指揮の下に奮闘するを辱せざるものなし、九月十九日、當後備歩兵第一旅團の、二〇三高地砲臺を攻撃するに際し、中隊長以下、皆死傷するや、自ら代て、陣頭に立ち、士卒を指揮して、再戦奮闘、能く其目的を達成せられたり、其後、十一月二十五日、鳩澤附近の戦場に參加、次で二十七日、再び二〇三高地を攻撃するや、中隊長を率ゐて、勇躍邁進、敵陣に肉薄し、最後の突撃を行ふに當り、挺身陣頭に立ち、刀を振り、勳聲部下の士氣を鼓舞して、正に敵陣に突入せんとするの瞬時、敵の亂射する一弾は、少尉殿に致命傷を與へたり、少尉殿 身に重傷を蒙られしにも屈せず、聲を勵まして曰く、退く勿れど、旅團の方向を睥睨し、劍を按じつつ、擔架に送られ、第一師團第三野戰病院に至り、遂に悲壯なる最後を遂げらる、嗚呼不幸なる哉、我が中隊の全員は、恰も百龜の浮木に離れたる如く、痛嘆幾何ぞ之に及ぶものあらん、願ふに、少尉殿 最終の目的を達せず、且有爲の才を抱き、餘命は人生の半にして、敵陣の爲めに盡らる、御一門の御愁嘆は、生等の心惜より、更に深きものあらん、然れども千古無比の國難に殉じて、芳名を萬世に遺されたる御偉勳を思へば、聊か御慰藉にも相成候儀と心得、茲に御奮戦の状況を具し、併せて一同に代て陸軍歩兵少尉足立美堅殿の爲め、追悼の意を表す、敬具

明治三十七年十二月十四日

後備歩兵第十五聯隊第四中隊長代理  
陸軍歩兵特務曹長

足立正聲殿

竹内寛吾

某氏の實地談に曰く、此日、君が引率せし中隊の現員は、二百〇三人なりしが、同日戦後には健全者僅に數十人、或云六十人を残し、のみ、就中、第三小隊の如きは、殆ど殲滅せり、君は、即ち第三小隊長と相並び、指揮督勵しつゝ前進したりと、又曰く、當日第四中隊の第一第二の小隊は、幸ひ無礙に進み得たれど、第三小隊は、突然、某部隊、或云後備歩兵、第〇〇〇聯隊の爲に、其前路、即中隊の間を遮断せられて、進むこと能はず、若し脚蹴せんか、徒に猛烈なる敵砲火を浴びて、所謂立往生たらんのみ、乃ち意を決して、彼

の部隊の罅隙を縫ひて勇進せしが、未だ先登の小隊に合し得ざる十二米突許の所にて、負傷して倒れたりど、君、戦死の即日、戦功に依て、功五級勳五等に叙し、金鵄勳章、并に年金參百圓、雙光旭日章を賜はりぬ、他の例を以て推すに、少尉にして、直に勳五等に叙し、雙光旭日章を賜はるは、最も異數の事に屬す、君が戦功の如何に拔群なりしかを知るに足る、君が戦死の報、九重に達し、

皇后陛下、并に 皇太子殿下

常宮、周宮、兩内親王殿下、梨本宮妃殿下等より、父正聲君へ、御慰問として、菓子を下賜せられ、

舊藩主池田侯爵より、亦帛綢を寄せ、贈を贈られたり、今茲四月に至て、去年以來征露の軍に戦死せし將校以下を、靖國神社へ合祀仰出され、五月臨時大祭ありて、

兩陛下御名代並に 皇太子殿下の御参拜あり君が遺骸も亦興かれり、榮極まると謂ふべし、

一御菓子

壹折

右陸軍歩兵少尉足立美堅殿戦死之趣、

皇后陛下被 聞食御尋として賜り候事、

明治三十七年十二月十五日

香川皇后宮大夫

足立諸陵頭殿

一御菓子

壹折

右は嫡嗣戦死之趣被 聞食

皇太子殿下より、御尋として、下賜相成候條、此段申進候也、

明治三十七年十二月二十二日

東宮大夫 齋藤桃太郎

諸陵頭 足立正聲殿

明治三十七年十二月二十一日



十  
常宮、周宮、兩内親王殿下より、御使加賀美御用掛を以て、美堅戦死之趣被開食依て、御尊被爲在、御菓子登折被下之

手控

一菓子

壹折

右令忠戰死之趣、妃殿下に於、貴官御心情之程、深く御推察、御尊として被爲贈候、

明治三十七年十二月十四日

梨本宮使

池田侯爵吊詞

陸軍歩兵少尉正八位勳五等功五級足立美堅氏は學士の身を以て明治三十七年征露の役に従ひ、旅順攻圍軍に屬して、屢戦闘に参加し十一月廿八日、二百三高地攻撃の際、奮闘戦死せらる、洵に痛惜に堪へず、然れども、其忠勇義烈、身を君國に効し、以て皇威を宇内に宣揚し、芳名を千載に留められしは、士人の面目、何を以てか之に加へん、茲に薄賜を贈り、弔慰の意を表す、

侯爵 池田 仲博

君が軍中にある、常に規律を嚴守し、善く部下を訓戒愛撫せり、又、隊中戦死傷者の功績を、細心に調査して上申し、自ら考ふる所公平を得たらむと信じ、聊か意を安んぜり、且身荷も中隊長たれば、隊中の安危は、一身にあり、故に一兵卒も徒勞せしむべからず況や徒死せしむるをや、戦機の熟するに従ひ、如何にせば、我に損傷少くして、勝を制し得らるべきかと、日夜痛念する旨、書信に筆せり、此の如くなるを以て部下、皆心服畏敬し生死を共にせむことを願はざるはなし、常に訓練あり、節制ある下士卒も、戦地にありては、動もすれば、放漫の舉動あり、命令意の如く行はれず、困難を起すことは往々免れざる所なれど、君の部下に至りては、常に和氣霽々たる一族の如く、上下親密なる情、他の中隊長の羨む所なりき、又豫備隊となりて、第一聯隊の作業補助に與かりては君が一箇中隊長、同聯隊の三箇中隊長の動作に比して、優れる所ありとて、同聯隊の將校間に好評ありきと云ふ、


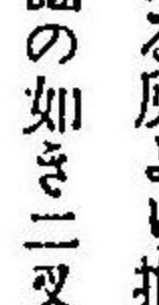
特務曹長古村梅彌(後に歩兵小尉)曰く、足立少尉は部下には言ふに及ばず、隊中の僚友に對しても、極めて謹勅靜平深切篤實にして、曾て他と争ひしことなく、就中、部下を待つに、寛嚴兼ね至り、一兵卒と雖ども、茫然として使役せず、故を以て、部下皆推服して、生死を共にせむことを願はざるは無かりき、云々、

君、嘗て古村特務曹長に語て曰く、一年志願兵は、軍事の教育淺薄にして、且怯懦なりとの譏あり、然れども、親友河原少尉(工學士)名は一耶、九月二十二日の戦に、奮闘して死せり、此の如きは、勇士の模範とするに足れり、吾輩之に倣はむかと、又曰く、萬一内地に送らるゝが如き事ありとも、必ず戦傷の爲めならむことを欲す、疾病に因るは、士の深く悲づる所なりとて、殊に攝生を重んじ、襦衣の如きも、常に清新なるを用ひたり、十一月廿三四日の頃、從卒に命じて雜品を數里の後に送り、軍服、軍靴、一切新物を着く、曰く、近日戦闘の開始あらむも測られず、屍を戦場に暴らすに當りて、敵をして、日本士官の服裝を笑はしむることなからむと、其新軍服は、父君が宮中より賜はりし服地を以て製したるものにて、精良なるものなりき、而して、軍の制規として、冬服の上に、必ず「カーキ」色の夏服を履へり、君の軍刀は、舊藩主池田侯爵家に傳來せし古刀を以て、父君が特に意を用ひて作らしめたるものにて、別に短刀一口を懐にす、是れは宮廷の鍛工宮本包則が鍛ひて君に贈りしものと云ふ、

君は、軍人として儼然ありしこと、彼の如く、亦農學士として、實に篤學なりしなり、君、軍中にありて、嘗て人に語て曰く、余は武門に生れたり、軍に臨みて、固より生還を期せず、然れども、家に老父母幼妹ありて、幸に皆健在なれば、若し生を全うして凱旋することを得ば、農學研鑽の爲に、數年間、歐米に遊びて、大に貢獻する所あらむとす、されば軍中にありても、土壤農作物等に意を注ぎて、研究を怠らず、同聯隊の少尉にして、農科大學林學科より出で「掘丹」二と、常に往復して、軍務の閑ある時は、共に土地の肥瘠を論じ、此の地は何々の栽培に適す、彼の地は林樹の經營に可なり等、談は毎に農學上において、往々、君に因て有益なる實驗談を聞きたりと、堀氏語れりと云ふ、君は旅順近傍の農事に關して、見聞せし所を記して、家郷及び學友に寄せたり、

君が十一月十五日の書の附録に曰く、暴横窮なき露軍の掠奪を被り、之に次ぎて、我軍の徴發によりて荒廢せる田圃、蓄積缺乏せる寒村、其平時の状態を窺ふに苦む、加之身は敵眼を遮蔽する必要上、田畑を横行して踏査をなすこともならず、只休宿せる支那家屋にありて、雙眼鏡により、外方を望み、片言交りの支那語と、筆談によりて、見聞せるものなり、旅順背面一帯の地には、水田を認めず、(潜水の不足より)皆畑地にして、耕さるゝ地は、山腹に及ぶ、只岩石質にて、全く耕鋤することを得ざる所と、傾斜急にして堪へざる所を除く外は、皆畑地なり、


此の方面一帯の土質は、片質岩(Schistose Rock)の崩壞せるものにして、所によりて、礫質なる所あり、(Quartzite)の礫を含む又、所によりては、粘質土なる所ありと雖ども、一般に、表土淺く、心土は、礫質砂、又は礫土にして、保水力に乏しきが如し、

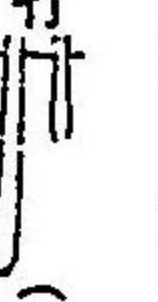
耕作物、高粱(玉蜀黍、英語カウリヤン)蜀黍、粟、黍、苳類(大豆、綠豆、小豆、紅豆)麥、陸稻、(少量のみ)蘿菔、山東白菜、  
 瓠菜以上の耕作物は、現時收穫せるものにつき、又は圃場につき見聞したる所より推定せるものなれば、夫れ以上の種類あらん、  
 農具としては、唐犁のみにして、他に農具を發見せず、其他には  圖の如き二又の  (木杖にて造れるもの) (此れは收穫  
 物を反轉するに用ふ) 雪掻の如き木製の平犁等なり、唐犁は、馬耕に用ふるものにして、我國の持立鋤に似て、其鋤部、稍異なる  
 のみなり、而して此犁を用ふるには、驢馬及騾(馬は餘り用ひず)を混じて、三頭位を用ひし、幼童をして驢馬の口を執らしめ、  
 一人は後より犁を以て耕すなり、

今頃(十一月初旬)盛に此馬耕を使用して、畑を耕せり、思ふに來春播種の準備ならん、  
 肥料は、人糞尿の外、厩肥を使用す、人糞尿は、旅順口より集拾じ來る、其他は、各戸の厩にある糞を、砂土と共に堆積して、乾  
 草(Purpate)の如きものとして使用す、

清人の馬匹飼養法は、粗放なるものにして、其飼料の如きは、荒寒の結果、缺乏せる爲めか、與ふる所、高粱稈を押し切にて、長さ  
 一寸位に截断せるものと、豆殼及び少許の蜀黍を與ふるに過ぎず、而して、其厩舎とあるべきものは、只石壁にて圍ひたる所にし  
 て、厩根もなき所に、晝夜晴雨を問はず、飼養せり、  
 清人の食物 玉蜀黍の粉を堅めて、小判形の食パン半斤位の大きにして、籠の釜の(大釜)周圍に付けて、此れを蒸焼にして食す、  
 其他は蜀黍の粥にして、副食物としては、大根を鹽漬(若干の粟糠の如きものを入れ)となし、又は白菜の鹽漬を食し、又支那味  
 噌にて、此れ等のものを汁にして食し、又は豆を煮て食し、其他、日本兵の殘飯を食す、

清人の起居 未明に起床して、野に出で、耕作又は收納をなし、夕に入りて、直ちに寢に就く、夜は不完全なる「ハヤ」などの「ラ  
 ンプ」を使用す、  
 婦女も出で、收納に參す、

村落には、其周圍に、楊柳叢の如きものを植う、  
 井戸は一村落に、三四ヶ所に設けてあり(村落の大小により、其數異なるも、一井を六七戸にて使用す)、  
 清人の收穫 豆類は、畑地の一ヶ所に墾地(打々、キ)の所を設け、其上に豆を厚く散布して、石製の棍軸 (Roller)  を、

驟に引かしめ轉せしめ、英と莖とを分つ、又穀打機  (我國に用ふるもの)をも用ふ、穀を打つには(麥等)樹枝によりて垣根  
 狀の粗なる稻扱の如きものを用ふ、

農民は清酒(アンチユー)とて、玉蜀黍より製せる透酒の如きものを製し、飲用す、以上は、今日迄見聞せることを思ひ出でたる  
 儘、云々、

(右の文中に、尙、家屋、風俗に係れる事あれど農事に關せざれば省けり、)

又家に寄せたる書信の端に「御地の菊化も、そろそろ咲初め候事と存候、土藏の側「ヨネモ、」は來月初め、葉をあらかた振ひ  
 候頃、上方に枝を延ばさぬやう、可成横枝を多く延ばす様に、山内に命じ、剪枝爲致下度候、とじて、樹を描きて、赤鉛筆を以て  
 枝の剪採點を示し、更に赤線の所より剪み去る、總て心を延ばさぬ様にする事、又彼岸前に、四尺位離れて、輪廻りに、滑き人糞  
 を御與へ被下度候、と註したり

君が農科大學在學中は、畜産學、及び園藝學に、特に堪能にて、卒業論文には、養犬に就きて詳論したり、犬に關する論説は、蓋し  
 大學に於て、君を以て嚆矢とす、又、帝國大學運動會の幹事を擔當せしこと數年、其周旋して勞を執ること、最も艱難なりきと云、  
 又、君が、石崎農學士と、三重縣に講師として聘せられたるは、明治三十五年七月にて、先づ、同縣三重郡農會の講習會に於て、昆  
 蟲學を講じ尋で、縣農會の農事講習會に臨み、肥料論園藝學を講じたり、歸京の後、書肆文學社主小林義則の請めに應じて、小學農  
 業教科書一冊、農業補習讀本、六冊、水産教科書、二冊(小石季一同著)を編述せり、農業教科書は、大に行はれて、岡山縣、山形縣等、  
 一般に採用せられ、明治三十七年までに發賣せし所、大凡六萬部に達し、文學社主、手書を送り、此事を謝せり、  
 岡山縣、美作國、皆田郡、林田村小學校にては、君が農事教科書を教科用として居たりしに、君が戰死を聞きて、生徒、連署して弔  
 詞を父君に寄せ、遺徳を仰ぐ旨を申し來りしかば、正聲答書して、訓戒の旨を述べ、君が寫眞一葉を送られたれば、寫眞を二百三  
 高地の圖畫と共に、額面として、學校の教室に掲げ、永く遺風を仰ぐこととしたりと云ふ、

未だ尊顔を拜し得ず候へども、愈御慰勝に渡らせられ候段恐惶至々に存じ奉り候、倍々甚唐突の至りに候へども、私共儀は岡山縣  
 津山町に接近せる林田村と申す小村に居住せり、日々村立の小學校に通學せる兒童にこれあり候、去る十九日、農業科の教授時間  
 に受持教師より、諸子が、よりにて農業上の智識を學習せる新撰小學農業教科書の著者たる足立農學士は、去る十一月廿八日二

○三高地の攻撃に参加せられ、名譽の戦死を遂げ給ひしこと、新聞に見えたりと承りし時、私共は、茫然として無限の感にうたれ候、私共は、一度も先生に拜顔を得しことなく、且何地の御方たるを知り申さず候へども、日々に手にせる教科書の著者は、間接の恩師と思ひ候へば一入御墓はしく存じ奉り候、爾來該書を繙くの際は、十分敬意を表し候事に相談仕候、あゝ先生は文を以ては農學に裨益し給ひ、武を以ては將卒の模範となり、千載に芳名を流し給ふ、さて御本懐の事は存じ候へども、御遺族様方の御愁傷の程察し奉り候先は御弔詞迄此の如くに御座候、田舎者にて禮にかなひ申さざる段幾重にも御赦免の程祈り奉り候、草々頓首  
明治三十七年十二月廿四日

岡山縣苫田郡林田村林田尋常高等小學校

高等第三四年生

山本貞藏

外二十二人連名

農學士足立美堅殿御遺族様 御中

拜啓 老生は、故農學士足立美堅の父に有之候、先般、美堅が歩兵少尉を以て出征中、旅順二〇三高地攻撃の際戦死致候趣諸君御聞に相成御懇篤なる弔書を被寄御至情紙表に溢れ、一讀不覺老淚を催し申候、諸君、美堅を御追慕下候となれば、何卒、益々御勉強、御成業被成度然候へば、美堅が靈も、定而満足致候事と存候、右御禮の爲め、美堅出征二三日前の撮影一葉相添、此段申進候也、

追而、美堅は武運拙く相果て候へ共、諸君、他日農學上の光輝を發せられ候へば、美堅が文運は、諸君に因て、永久に盡きざる譯と存候間、御奮勵の程希望致候也、

明治三十八年一月八日

山本貞藏以下宛

足立正聲

君が死を聞きて、故友、知人、未見の人まで、弔書を父君に寄せて、名譽の戦死は、國家への義務とは云へ、多年研鑽せられし學術を實地に應用せられざりしは、遺憾なりとて、追悼するもの數ふるに暇あらず、君をして、適任の事に力を盡さしめしならば、劍銃

の功績よりも、更に大なるものありしならむに、惜しむべき限りなり、  
君父に孝にして、未だ嘗て其命に悖りしことあらず、母大谷氏、諱以知子、早く歿せしかば、幼より、繼母波多野氏、多世子に鞠育せられ、而して、其相親愛敬慕すること、所生に過ぎ、人其繼母たるを知るものなし、君享年、三十、未だ娶らず、二弟三妹ありしかど二弟共に夭し、二妹他に適けり、妹氏に對して、友子の情厚く、軍中より寄せし書に、維々の情多し、其他出征以來、父君、親戚、友人に書信せしもの、數十通あり、文字、委曲にして、文、平生の談話の如く、間、諧語を交へて、情意掬すべし、君、資性溫和にして、操行端正なり、而して、活潑の氣、洒落の風ありて、胸間淡泊なること、水の如し、美堅を名とし、水石を號とするは、晏子に、美哉水乎清々、堅哉石乎落落、の語に取ると云ふ、實に、其人格を表すと謂ふべし、善く人と交りて、最も信義に厚く、東京に生れて、足、苜蓿なる因伯の地を踏まざれども、在京の因伯人士には知善にして、祖先墳墓の地を忘れず、又、常に親戚故舊を存間することを怠らず、謙讓にして、人を凌かず、人と争はず愛情溢るゝが如くなれば、幼児と雖ども、君が面を見るを喜ばざるはなし、常に談話を好めども、朋友の善惡長短を、陰に批評せしことなく、節儉を守りて、能く物を保存し、人と金錢を貸借せしことなく、浪費せしことなく、亦鄙吝の態度なかりき、唯好む所は漕艇と銃獵のみ、蓋し、生質の虚弱なるを以て、身體を鍛練せむが爲なり、余の仙臺にありし時、君來て第二高等學校に入り、余が家に寄寓すること數年なりき、君の最も稱すべきは、酒色を近づけざりしことなり、此事、余が數年の親炙に因て保する所なり、東京に移りし後も、舊誼を存し、時々訪問を絶たず、君が出征の時、君を送りて、父君と鼎坐し、談話して、其行を壯にすることありしに、今や回想の念に堪へず、君が計の至りし時、余、父君を訪ひて弔慰す父君曰く、一死國に報いたは、父の命を守り、又軍人の職分を盡したので、覺悟の上なれば、固より言ふべきこととはござりませぬ、唯三十年、此の世に、困しみに生れて居たやうなものと思へば、惘然と思はぬでもござりませぬと、嗚呼、此の一言悽愴の情何ぞ堪へむ、況や一人の男子なりしをや、父君、余が居を訪はれし時、山妻、父君に言て曰く、美堅さん、御出征以來、一日として思はない日はござりませんでした、御戦死と聞いて、がっかりいたし、もう戦争は済んだやうな心持がいたしますと、相見て泣然たり、君が余の家族と、常に噂々として談笑せし状、尙目にあり、今は幽明界を異にして、復た其温容に接すること能はず、君が如き忠孝兩全、文武雙美、情意兼ね至れる青年、亦多く得べからず、傷ましい哉、

明治三十八年八月

文學博士 大槻文彦

明治四十二年七月七日印刷  
明治四十二年七月十日發行

正價金壹圓八拾錢

著 者 農學士 足 立 美 堅

發 行 者 東京市赤坂區溜池町壹貳番地  
大日本農會書記長 安 藤 安

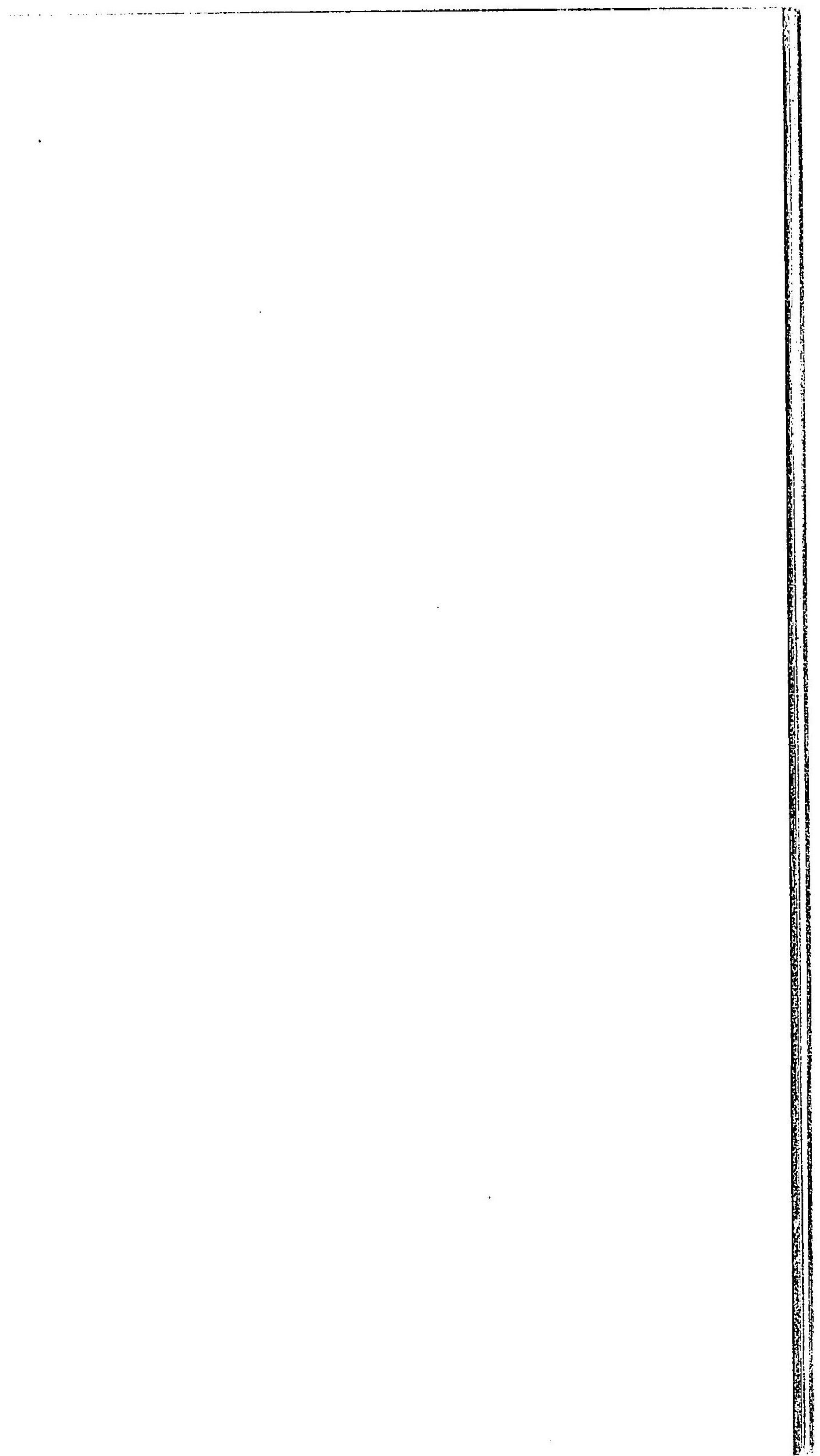
印 刷 者 東京市日本橋區兜町貳番地 神 谷 岩 次 郎

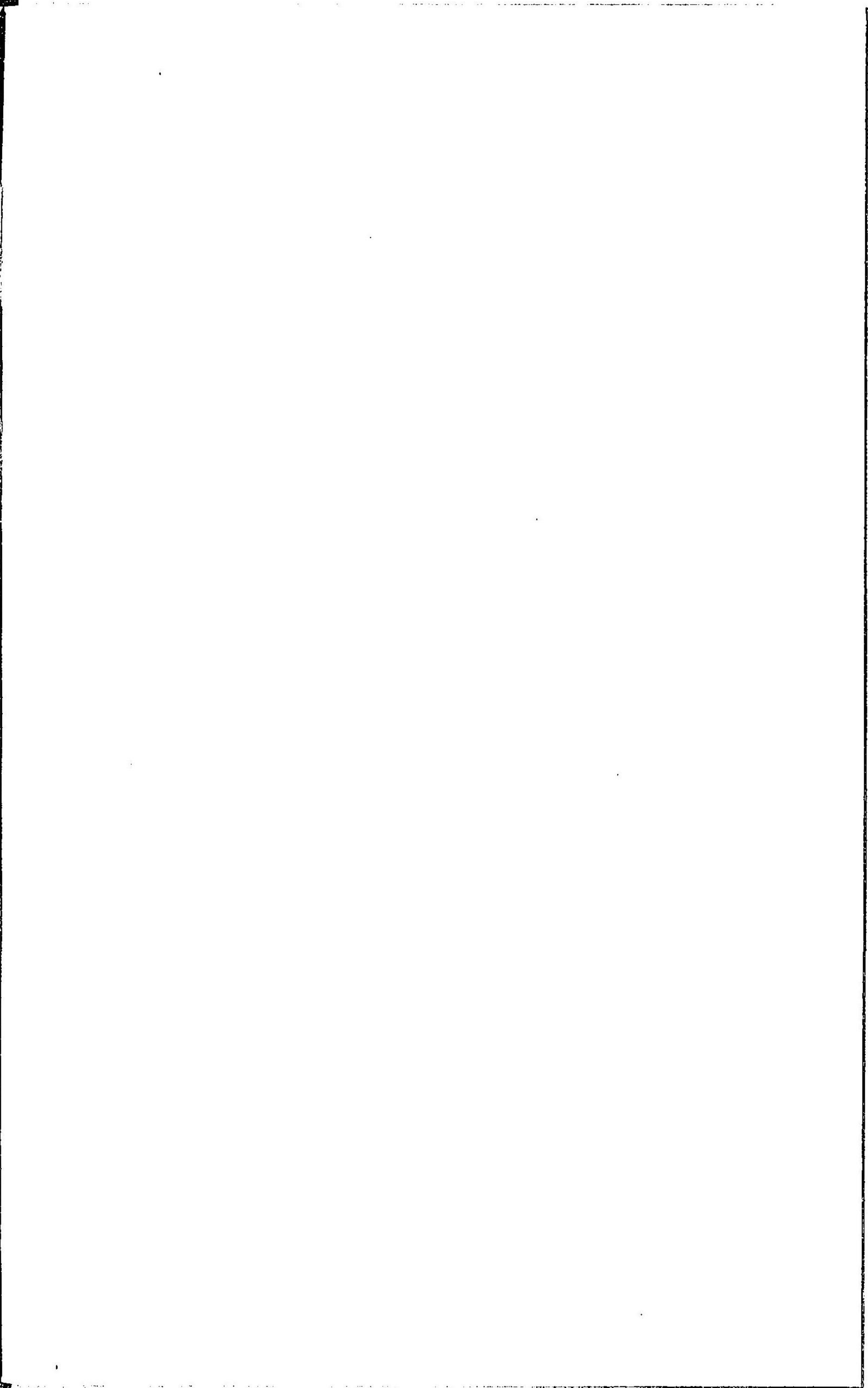
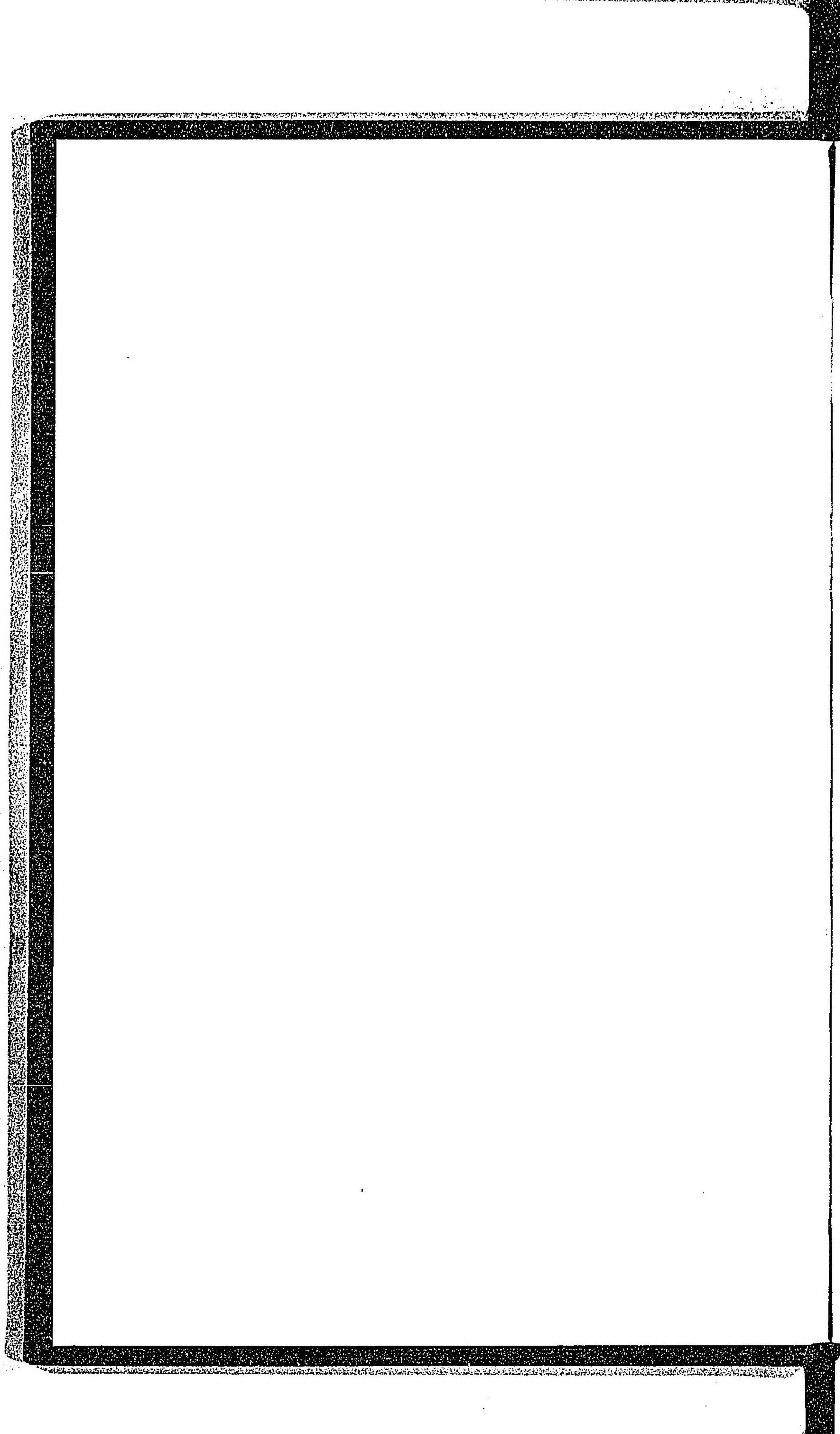
發 行 所 東京市赤坂區溜池町壹貳番地 大 日 本 農 會

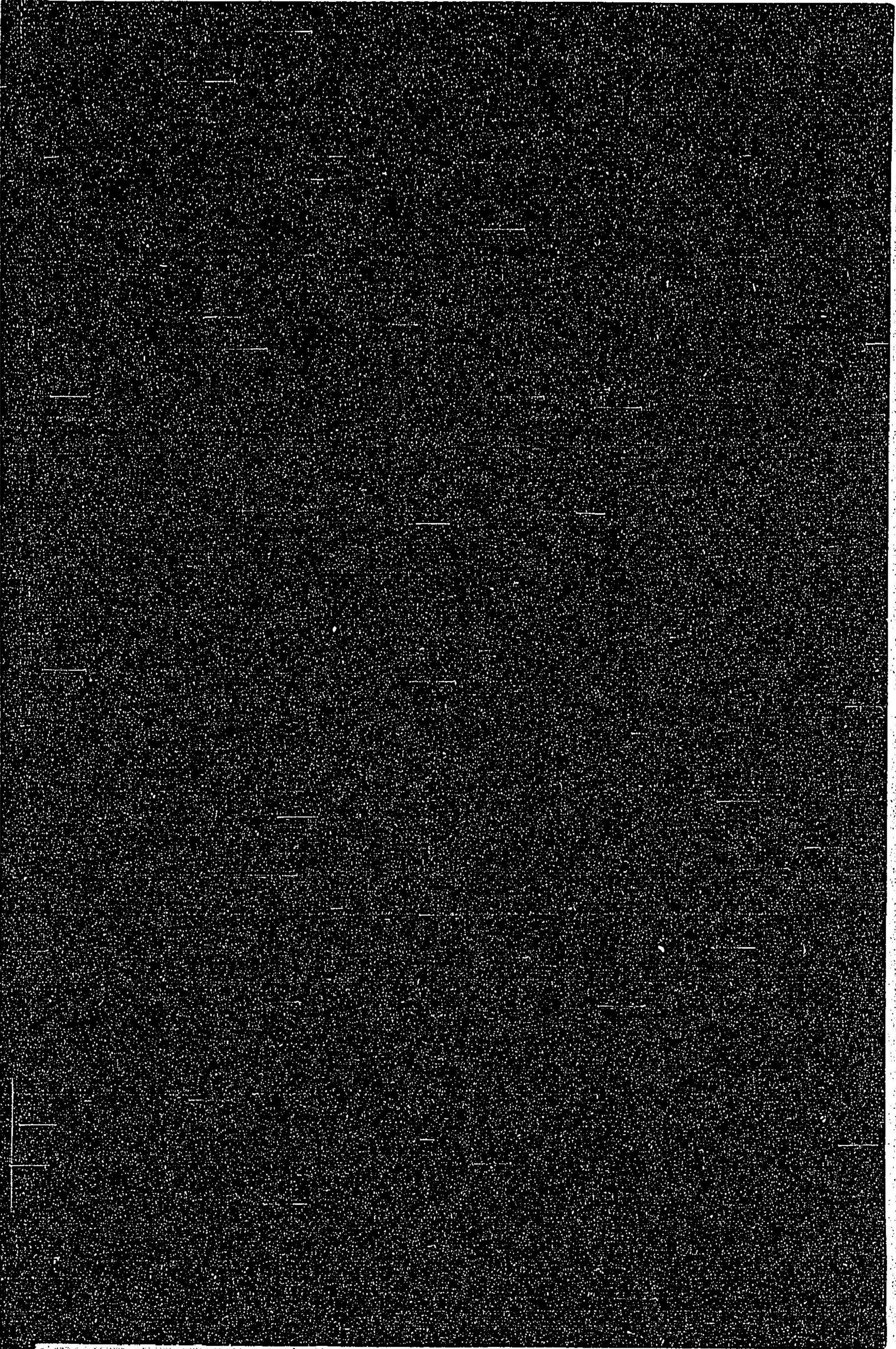
印 刷 所 東京市日本橋區兜町貳番地 東 京 印 刷 株 式 會 社

5/29

9928









64

212

064604-000-6

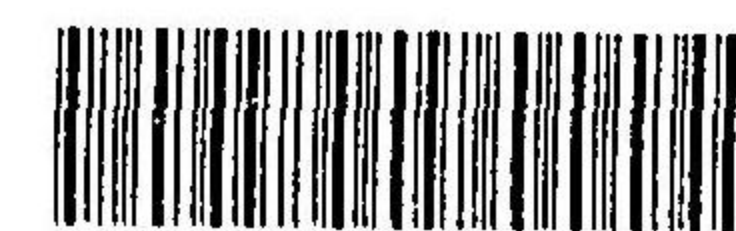
64-212

いぬ

足立 美堅/著

M42

CCD-0015



64-212

